

和歌山県立近代美術館

年 報

昭 和 51 年 度

昭和51年度

# 和歌山県立近代美術館年報

## 目次

原勝四郎『滞欧日誌』について	1
1 主要行事	14
2 主催展覧会	
昭和51年度前期 県立近代美術館常設企画展	15
第3回移動美術館 橋本展	16
木下義謙作品展	17
〔図録掲載年表の補遺と訂正〕	20
昭和51年度後期 県立近代美術館常設企画展	23
田中恭吉展	24
3 共催展覧会	27
4 貸館展覧会	28
5 普及活動	30
6 昭和51年度所蔵作品	32
7 所蔵品貸出状況	34
8 県立近代美術館協議会委員	34
9 県立近代美術館職員構成	34

# 原勝四郎『滞欧日誌』について(I)

学芸員 仲田耕三

原勝四郎が昭和39年4月14日に亡くなられてから早や14年の歳月が過ぎ去った。その間、昭和42年京都国立近代美術館主催「異色の近代画家たち」昭和47年和歌山県立近代美術館主催「原勝四郎展—その自己表現の軌跡—」、昭和48年梅田近代美術館主催「原勝四郎展」、同年神奈川県立近代美術館主催「原勝四郎展」と展覧会が開催され、近年原勝四郎芸術が正当に評価されるに至ったことは喜ばしいことであった。

原勝四郎の生涯は 1、生い立ちから画家志望まで。2、東京美術学校入学から渡欧まで。3、帰国から二科会の時代まで。4、二紀会の時代から没年まで。と、大きく分けて4つの時期に区分されよう。その中においても東京美術学校入学から渡欧の時代は、原勝四郎芸術の心髄を探る上で最も主要な時代と言える。原勝四郎は前後2回上京しているが、その1回目が東京美術学校予備科時代で約2年の修学の後家庭の都合で帰郷している。2回目が大正五年帰郷までの約六年間とみられ、この間に赤坂溜池の白馬会葵橋洋画研究所に通い洋画を学んでいる。2回目上京の交友として熊谷守一、山下新太郎、石川真五郎、河谷清一、信時潔、颯田琴次、福家辰巳、川上淳、貫名美名彦らが著名であり、当時の勝四郎の逸話が熊谷によって伝えられている。(熊谷守一『へたも絵のうち』)大正5年には渡欧準備のため帰郷しており、同年の8月9日付とみられる南方熊楠宛の書簡が知られている。その中で渡欧に関連するとみられる部分を次に抜粋してみよう。

『近頃、年三十一才ともなり慾火が少し鎮まりましたのでこれからこそ真の修業にとりかかろうと存じましたが、今まで手前はどうせ

器用に世の中を渡ることのできる奴ではないから俺が働いて喰わせてやるから、その代りどこまでも真実のところをやりとげよと、永年の間小生を養って来ていた哀れな兄保吉も、とうとう自分の口すら乾上りそうになって、こうなつては可哀相だが手前も一つ自ら営めと申され、樹から落ちた猿同様、甚だ困却いたしております。もとより猛志はたけり狂うてはいるものの、食わないで生きる方法はなく、加うるに精神の上でもはや日本国で摂受し得るほどのものは悉く喰みつくしたので、いでこの上は多年心にかけて明け暮れ慕いあがれているフランス国に押しわたり一勉強を試みようと思ひ立ち、幸いにも先輩(山下新太郎・筆者註)の援助を得て、ようやくフランス国もすぐ鼻の先というところまで漕ぎつけ、もはや約束の地は大丈夫踏むことができた喜び勇みし、その甲斐もなく、外務大臣(石井吉次郎・筆者註)が余計な心配をいたし、そればかりの僅かな金でパリへ押し出て行つては迷惑だとの理由で旅券を下附してくれず、中に立って周旋してくれた人(森鷗外・筆者註)が大丈夫と申されたので安心して一切をまかしたのですけれど、このような結果となつては甚だ残念だけれどももともと事のなるならぬで腹を立てるようでは、精神的事業に従事すると申している身では恥ずべきことと存じまして何も文句は申さずに黙って引取りました。「人河を渡らば必ず彼岸に到れ」。一度び思い立ったからにはたとひ到底越えることができないと相場をきまらした壁が眼前に立ち塞がろうとも何かあらん。何が何でも越えて行こうという精神さえ熾ならば、たとひ頭を打ちつけ、脳骨が砕

けて相い果てても法身は全きことを得よう。この上はひとまず支那の開港場にでも押し渡り、機を見て、一步一步と約束の地に近づこうと決心いたしました。さて、この行路は一度び出るとまた何時の日にか帰国するかたしかでなく、その上自身は、古羅馬の曠帝マールカス・オイソアス、下つては十七世紀フランスの画傑ピエール・ポール・リュウバンス等の流れを汲み、質素廉潔の資に加うるに、傲岸不遜の悪辺をも交えているので、植民地などの人足共の間に伍して立つてゆける代物ではなく、またわが絵は心あり、眼のある人士にのみようやく理解せられるべき性質のもので、たとひ欧州人であったとて、場末の植民地などにうろつく輩の眼に入るべき筈もないから、約束の地はおろかすぐ近くのそこいらのところで餓え死するかもわからず、自分では人らしき人間に仕立て上げることができなければ決して故郷の地は履ままいと我慢いたしてはいますが、兎は千里の外にあるも、親の心はそのあとをついてまわるとか聞き及んでいきますので、せめて一度暇乞いのため母をみに帰ろうと八年振りて帰郷いたしました次第です。』

『先生、人誰かその生れた郷土、その生れた邦土を愛しないものがありますか。小生とて何の理由があつて決死隊などでフランス国の土になりに行こうなんぞというただの物好きで、フランス国へ赴こうと企てましようや。実はよくよくのことなればこそであります。六かしいことは存じませんが、詮ずるところ楽しくと飯が食べられ、人からは、ちやほやおだてられ持ちあげられ、その上女でももてるならば、人は決してその地を呪いなどは致しませぬ。小生とて、もっと楽に氣息をつくことができ、もっと楽に飯を食うこともでき、作品もどしどし出来、そして女にもてるのなら自分の生れた国土ですから、よろこんでそこに生えつくことでしょう。しかし悲しいかな、見るもの聞くもの一切が気に喰わず、精神上の饑渴が甚だしく、その上口を糊する道は一向に辨えず、いかに立派な絵を描こうともがいてみましても、精神にかたてなくては心眼が開かず、心眼が開かない

では何を描いてみたとて皆嘘でございます。それでもせめて女にでも持てるのでしたら、また人生にうるおいも生じ、元氣も盛り返えしましょうけれども、いつもいつも肱鉄ばかりということでは、この地にはいられない方の条件ばかりがすっかり調うているというわけでございます。しかしながら、たとひ約束の地フランス国に致り着きましたとて、わが想う理想の黄金国が現ずるとはさらさら考えておりませぬ。馬鹿氣な事ならずべてに業が強く利いている小生のことですから、それだけにフランス国へ行けば一層馬鹿氣たことが多いだろうと覚悟はいたしております。オペラ女優や地獄女どもが如何に妖艶であろうとも、われにおいては何かあらん。全く関係のないことです。年ねんに開かれるサロンに俗画がどんなに数多く懸け列らねられ、貴婦人令嬢などと申される馬鹿氣な者どもが、われは顔して芸術についてとやかくの事を論じてたとして、やれフランス国は文化と芸術の国だなどと有難がるほどの田舎者ではありません。ほんの小数の識者が相つき相つき世の喧燥にも煩られされることなく、ひたすら道を行ないすまして、かの典雅かつ荘嚴なラテン文明を二千年後の今日にまで伝え、サイエンスと芸術とをもって安息と平和を世界に齎らそうというあのフランス魂というやつが懐しいからこそ、小生は道を尋ね求めて生命もかけて、フランスへ赴こうと存じているのです。パリの真中に身をおいても矢張り深い顔して毎日を暮らし、ルーブルにリュウバンスを訪ねてやつと眉をのす位のことでしょう。大本尊レオナルドの手記にこういっています「しかうして、諸徳の避難所は夢と空しき希みとの満てる所なるぞ」と。悲しいかな、この言や。それでも生命の為には偉いなる靈はみなすべて忍んだところでございます。先生いかに空しい希望であろうとも小生は陣笠を引きかついで、風塵の巷へ飛び入ります。』(岡本清造『南方先生と原画伯』昭和42年9月24日より10月10日まで紀伊民報掲載)

勝四郎は南方熊楠に長文の手紙を出しており、渡欧前の勝四郎の心情を知る上で貴重な資料と言

える。上記の抜粋文においても、渡欧に至った状況、決心、希望、予想が客観的に述べられている。大きな夢を抱き、念願の地フランスへ赴こうとする画家にしては、出発前から悲観的且つ悲愴的であり、勝四郎の渡欧生活をすでに予見させていると言えようか。勝四郎渡欧の要因は書簡より次のように思われる。その第1は兄保吉の困窮により経済的自立を迫られたこと。第2は30才という年令的な節に入ったこと、第3には自己の発展の地をフランスに求めたこと、第4にはヨーロッパ文明と自己との同調を求めたこと。以上が渡欧に至った主な要因と推定される訳であるが、折しも世情は第一次世界大戦の最中であり、当時パリには藤田嗣治・青山熊治の2人の日本人画家しかおらず、渡欧の時期としてはまた最悪であったことも勝四郎渡欧に際して大きな影響となったと言えよう。

大正6年夏、日本出発。サイゴン、マルセイユを経て12月パリに着く。大正7年、パリでしばらくアカデミー・ド・ラ・グランド、ショミエールに通ったが、軍需工場労働者、ペンキ屋、木材運搬人夫などをして働き、リヨン・グルノーブル、サンテチエンヌなどを放浪。再びパリに帰る。大正8年、秋までパリのスワ・ホテルで働いた後、マルセイユからナポリ、ローマ、カンヌを訪れてアルジェリアに渡り、アルジェに約2ヶ月間留まる。大正9年、1月中旬アルジェを去り、フィリップビル、ポーヌを経て、サン・ポールの農場で約9ヶ月過す。10月フランスに帰り、モンペリエで1ヶ月入院のち、バイヨンヌ、レオンを経て徒歩でボルドーに向う。大正10年、アルカションを経て、2月ボルドーに到着。ここで帰国を決心してパリに戻る。4月マルセイユを出帆。5月21日神戸上陸、25日故郷に帰る。以上が勝四郎滞欧時の簡単な経過である。勝四郎は滞欧中2冊の日記を書いているが、残念ながら現在一冊しか残存していない。失われた一冊は前半部で大正6年夏から大正8年7月までの期間のものであり、当時の勝四郎の様子を知る貴重な資料が紛失したことは誠に残念なことである。勝四郎の言によると「この当時、女にほれたことなど全部日記に書いていたのですが、途中で日本へ送ったとき戦時中だったためか画だけ着いて日記の方は到着しなかった。没収されたのでしょうか。」とあり、当時日記の失なわれたいきさつがうかがわれる。現在残

存している一冊は後半部で大正8年8月3日から大正10年5月27日までの期間のものであり、当時の様子が詳細に書かれており、勝四郎芸術の心髄を物語る貴重な資料と言える。日記は黒表紙のトランシット・ノートに小さな文字でびっしりと書かれており、第一頁に滞欧中の行程が次のように書かれている。

- 1917 夏祖国出発 十二月末巴里着  
1918 *Materiel roulant* ——  
*fû hir on ā Marmeaux* ——*Lyon*  
—*Grenoble* — *St. Etienne de St. Gorge*  
— *retourne ā Paris* ——  
*Télégraphie . Militaire*  
1919 *dû Souwa*  
*Italie , Cannes , Algérie*  
1920 *Algérie , retourne eu*  
*France , Montpellier*

以上の文章により、勝四郎滞欧時の行程が大まかにつかめるわけであるが、今回、残された日記の全文をここに紹介し、勝四郎芸術の実像追求の一資料として提出する次第である。文章は言葉使い、誤字、フランス語をそのまま用い、出来得る限り原文に近い形とした。尚紙面の関係上、日記全文を一回で掲載しきれないため、今回はその第1回とし、以後、年を新めて全文掲載の予定である。

Août 1919

le 3 (*dimanche*) 少うし気力を恢復したぞ。どうも下女の奴丈には降参スル。これも何とかして卒業したいぞ。今日は*Melie*に可いた感情がさめてくるとどうしても何か知ら愛情をよするものをこしらへなくてはやりきれない。*Helène*を想ふとどうも何かすがれた花の様な気持ちを起さないではゐられない。*Marseille*で最初見た時には全く若いと思つたが*Paris*での印象では——皆のいふ程の年とは信ぜられないが——何か知ら大変年となった女かのような気持だ。水々しい気持は一向残されない。しかしまったくややしばんだ深紅のカー子—ションの様に痛々しく、非常におれをうごか

す。*Marseille*へ行って彼女の肖像をかきたいな。  
le 4 (*lundi*) 今日はどうにも我慢が出来なかったので下女に文句をつかれる法はない。いつでも出て行けるといふ。とうとう風邪以来ヨリが戻った本がちっとも読めはせぬ。夜一寸長谷川の處へよる。

le 5 (*mardi*) まて、齒を可むででも待て。懐が出来なくて何が出来るか。待てもう少うし我慢しろ。フランスもクソもあるか何国人だとして下人は七生迄の仇敵だ。下女の奴茶を出さないからとうとう主人に言つて見てやる。奴も中々まけてやせぬ。門池(カ)などよりよっぽど見苦しくない。しかし可愛さうだな。女には負けてやった方本当だ。何とはなし気持がわるい。少々いやだな。金ためろ。何でも金ためて*St jean de Luz*から*Marseille Nice*へと落ちて行かうぞ。

今日も*Italie*領事館へ行った。あの女記書はどうにも好きだ。おれにはある特別の好みがあると見える。好きな奴とくると、もうむやみに可愛ゆい。実際形といつても一つの心で統一せられてるものらしい。あの女書記などは其手其指先を見てても好きだ。今日は*Théâtre*の宿へ行つて残した荷物をとって来たがこんな處で絵など見ると変な気持だ。此頃のように危いぞ。懐中がすっかりなくなったじゃないか。金をためないでどうなるか。

le 6 (*mercredi*) どうも面白くない。クソ正直になんかやってちや生命がもつまい。よい加減にやってやれ。腹立てるな。今頃破っちゃ何にもなるまい。危いな。いはば大暴風雨だ。何とかして乗切ってくれ。女に使ふか何か買っておくのならよいが、酒や喰物に懐をはたくのはいかにも惜しい。おいおい何とかして*esprit*を引張出せ。こいつを喰つた方が一番かしこさうだぞ。だうも精神のウツウしい事はどうにも法がつかない。此間中からとうとうタガがはずれたので悪いクセがついちゃった。しょつ中酒のみみたい。しょつ中煙草をくわへてゐなくては我慢出来ない。これじゃ仕様がないぜ。とに角此暮は乱暴過ぎる。さう永く我慢出来る筈のものじゃない。それならそれで一日も早く足を洗ふ算段にかからうじゃないか。つまらぬ金を使ふのは止して何でも少うし用意をせうじゃないか。駄目だ。心のどっかでつぶやいている。とても望はないと。実際大風だ。そして囿は失はれている。

le 7 (*jeudi*) 秀子から手紙をよこす。思ひがけなく*Marseille*から*Helène*の写真を送つてよこす。どうも*Théâtre*の家で*Helene*を見たと同じくこれが*Helène*か知らと思はれる。しかしどうにも好きな奴だと見え写真を見てすら心が静かでない。おれには物質的の見方といふものはカク別好きでもない奴に丈より用ひられない。好きな奴一つまりは魂だ——の前へ出ると、とても世間のいはゆる冷静な見方といふものは行使出来ない。しかしおれにとっては此動乱の心地は決して悪いものじゃない。そして仕事といふ奴は比動乱の気持を恐ろしい心力で統一した時になされる。さあありがたいぞ。彼がやうやく静まりかかった。どうか少うし静かにつづけたいものだ。おれはいつも酔つてみたい。馬鹿気ててもよい。感激してる方が心地よい。

le 8 (*vendredi*) 金ためろ。本を読め。そして*Marseille*へ飛出せ。

le 9 (*samedi*) どうも*Helène*の*image*を見てると何とも知れない柔さで心がふるえる。少うし昂奮していけない。感情が激動すると胃の消化力に影況(カ)する。心地騒がしい。煙草がちっともうまくない。*Helène*は仕方ない*Melie*は少うし困る。*Anna*がいろいろいいな。*Anna*の*image*はよこすかな。どうも昂奮していけないな。——晩女の側で眠りたいな。

le 10 (*dimanche*) *gare de invalide*へ客を送つて行く。女を見て*Radda*の門をたたいてかへる。写真をとる。女もよいが矢張前へ行くといふような奴でないといけな。いけな。いけな。*Anna*に金を送つてやる。写真をよこすか知ら。どちらにしてもよい。可愛ゆい*Helene*の妹を喜ばしてやれば沢山だ。

le 11 (*lundi*) 折角酒に酔つてゐながらに泣きたい程悲しい。何も可もぶちまけちまへとも思ふぞどっかへ行きたいな。何處か知らないがどっかへ行きたい。

le 12 (*mardi*) 又一寸荒模様だ。憤恨感が激発すると何も可も粉ミ塵にくだいて了ひたくなる。『何でオメオメ生きてるか。余り馬鹿々々しい暮だ』と心が泡をふいて呻いている。実際早く時の流れる事のみ望まれる。とうてい望はない。思ふ事のほんの片端も出来はせぬ。金ためるたつてとても駄目だ。本を読むたつてこれもとてもむつかしい。*esprit*と柔しい感情がなくなると一切に耐えがたい腹立たしさと押へがたい悪しきを感じ

る。おれの心はとに角余り気マグレだ。何ともシマツがつかぬ。とうてい自分で制御しては行けない。

Helèneの写真を見ると翹のくさったような面してやがる。Raddaが何だ。Lucienneがどうした。Paule何が貴族的だ。何とも面白くない。樹陰の草の上へでも御向にひっくりかへって青空でも眺めてくらしたいな。どうしてもMidiへ行きたい。しかし此調子じゃとうてい駄目だ。何も可もつまらない。何も可も望まない。どうにも心が騒ぐ。自由がほしいのだ。おれとも時には憩ひたからうじゃないか。Madoのロクでなし。今はどこではしゃいでるか。しかしおれは自分といふものを思ひきりひくく評価する。Madoおれがロクに喰はないで寒さにふるえてた時Madoの手紙はどの位おれを嬉ばしたか。MadoおれはMadoをわるくはいはぬぞ。

Helèneやっぱり可愛らしい。おれは狂人だ。こうして絵のかける筈はない。しかし本はよめなきやならない。何で本もよめないのか。煙草は仕方ないがもう酒はかふな。どうか四五百フランがものはたくわへてくれ。いささかの才能とはいへ今少しそいつを可愛がらうじゃないか。餓も寒さも、雨にうたれ風にさらされ波にゆられた事も草の上に眠った事も皆忘れた。しかしかかる事のみ常に心に浮べなければ現在の境遇を忍ぶ事が出来ないとは何たる事だ。憤恨と屈辱感で心狂はしい。

午後客を案内してルーヴルへ行く。客を送りつけておいて女部屋へかけつける。冷やかに笑ひながら女なんか見て来たとして何にもなるのじゃない不アイツにしられようがどうせうが前へ行くと何とはなし可愛いといふ気持でいっぱいになる奴でなくてはいけぬ。矢張Helèneへ行くか。Louvreへは入って見る。絵なんか何でもなし。それでは何が希められるのか。今の處何よりも先づ自由と休息がほしいのだ。

何にも面白くない。これは少し危いな。恐らく疲れたのだろう。

le13 (mercredi) 朝から腹立って仕方がない。折角の懷中をふりとばしたのが情ない。とうてい思ふように行かない。しかし自分で自分が制せられないたって他の所為じゃない。若し他の所為も少しはあるならそいつとケンカすりゃいいのだ。弱いので出来ない。それでひとりで怒ってる。仕方がない。さういふ奴の逃場は発狂する事だ。気

狂も情ない。そんならもっとゆっくりやってやろう。必しも弱かない。しかしviolonとカバンをかひ宿錢をはらって了ふ迄は我慢しろ。どうかたのむぞ。午後青山君がやってくる。おれとても自由の暮がほしかろうじゃないか。我慢して五百フランためろ。そして南へ出て又人足にでもなれ。

le14 (jeudi) 少しどうかしたと見える。非常に頭がうとうしい。神経衰弱だ。夏らしくなったからかうなんだ。少しでも寒くなるとちぢみ上って了ふのだが、暑いとどっかへかけ出したくなるのだ。何にしても非常にあぶない。何にも面白くない。何にも望がない。何にもほしくない。只眠りたい。非常にものうい。心がいきまく。素裸になって踊り出せ。何を怖るのかといきまいている。心の上にしぼりつけられた鉄鎖がいかに耐らない。espritさへあればこいつは容易にとき離せる。しかし悲しい事には此頃其espritがどっかへ行った。どうしてかうしばしば大暴風雨がやってくるのか。港を望むぞ。しかしどこにも近くに港は見当らない。金ためるなんて言った處でとうてい駄目だ。Calvadosのおやちにつきり拂ってやる。さてこれでさっぱりした。此次は絵具箱をとりかへしviolonとカバン一つかへばよい。こだわると耐らない。破るには及ばないが破れてもかまわぬといふ気持ちの方楽でよい。

le15 (vendredi) 好んで自身を虐げるのも可なり馬鹿な話だ。安息といふ事は重んじなければなるまい。これで精神が鬱に傾くのを噴けたとてそりゃ駄目だ。時には安息の時間をこしらへるのこそ本当だ。少し永くこの暮しをつづけるつもりなら主人に話をして一週一週の休息の時間を請求するのだ。さもなければ非常な我慢をして二月なり三月なりの用意をしてここを出て了ふ事だ。前者はとうてい行はれまい。後者も可たい。しかしまず後者に見当をつけて一辛棒やらうじゃないか。どう考えても此暮しは余りに悪い。これで忍べるならほめられるよりはむしろ嘲笑せられる方本当だ。心といふものは重んじなければなるまい安息といふものはあらゆる美德の本源だ。スープ一杯の夕食を喰ふ。何とはなし大変に不愉快だ。殆ど一切望まない。只生きんが為にかかる屈辱の生を忍ぶのも耐えがたい。又餓死と牢屋が思はれる。

le16 (samedi) 夜少しし氣力を盛返す。よろしい主人に談判して、一週半日の休暇をとってやろう。さすれば少し頭に変化がつけられる事だら

う。同じくマルセイユへ行くにしてからが二三度はAnnaでも見得る位の用意をして行かうじゃないか。千フランたまる迄先づ向ふ十ヶ月は一我慢せうじゃないか。何にしても一つ休暇をとる事だ。

le17 (dimanche)

le18 (lundi) 一寸夏らしい。早く夏が過ぎさへすりゃいいのだ。Marseilleも結構だが人足はなる丈止さうじゃないか。周囲におれをして柔しい心をいだしめるものがなくてははいけない。此点でMarmeauxの印象はわるくない。

le19 (mardi) 少々暑いな。折角御辞儀をしてもうけた金もすっかり出て了ふ。とても駄目だ。Marseilleもいつ行ける事やら。新聞広告もとても駄目だ。よろしいこれも恐らく何か反響もあるまいかMadame LaraとMlle PauleとにかいてMarseilleで首でもくくるカンペをしろ。

le20 (mercredi) おれとても絵描として暮したい。青山からReuoirを訪ねたと書いてよこす。嘆くな他の様には生れてゐないなら今更仕方はないではないか。忍ぶさ。そして他の人間のうけ得るものを拒まれる代りには彼等の持ち得ないものを<sup>(?)</sup>捉みに可かるさ。嘆くな。しかしおれとても絵描だ。

le21 (jeudi) どこからも返事をよこさぬ。どうもこちらからの手紙に既に熱がないと見える。番頭さんの氣持がどっかに出てるのかも知れない。耐らないな。

le22 (vendredi) Mlle LuceeneとMorseilleの沖売婆さんから手紙がくる。Marseilleには仕事はないといふ。よしんばあったにした處で又再びGrecやEspagnoleやArabの中へは入るのは情ない何にも大した事を望むのじゃないに、どっかに今少しよい處がありさうなものだ。自ら責めたとてとうてい駄目だ。おれはとうてい立志伝中の人物じゃないから。少し自由の時間がほしい。これ位の要求は当然だ。これをしも忍べないとて自ら噴むるのは間違ってる。悲しいな。思ふ事——<sup>(?)</sup>実にささやかな希に過ぎないが——皆とても運びはせぬ。失つ第一の金の問題だが、とても六つかしい。実際おれは料理ならば一番うまい處を喰って後はすてて了ふといふ奴だ。此世でも一番気に入ったもののみ見て、後は相手にしたくないといふ奴だ。しかし実際おれにおしつけてるものはいつも一番美味なもの處か、汚いとも汚い處ばかりだ。生きてるのも恥多いな。おれの道念にはあら

ゆる残酷なる悪行よりもトン慾とリンシヨクと無智がもっとひどい不徳として考へられる。それは一等汚いからだ。一等自省力を欠いているからだ。とに角あらゆる不徳のうち卑隨の感が丈も強くおれを奮激せしめる。此家も可なり耐らない。しかし一つは生きんが為又一方には考年だから其衰タイ感が、時におれの同情をひくから我慢してるのだ。しかし何にしても恥辱の感は殆どつねに耐えがたいぞ。今迄の様でもとうてい駄目だ。今の態でもとうてい駄目だ。そりゃどうしてよいのか。思煩ふな。生きてさへるりゃいいではないか。日置氏の話はとても駄目だろう。さすれば我慢してせめて三百フランはこしらへろ。そこで主人も人と人間らしく生きられるようにしてくれと談判をする。同時にMlle PauleとMme Laraに可く。新聞へも広告して見る。児島氏にも相談する。どうせ皆駄目だろう。さすれば南の海の側でHelèneを見た後路ボーに行たほれといふ覚悟でここを去るさ。喰へる時間はありあまる。それでみて文句がいへるかといふか。しかしおれはとうていそれ程エラクない。今のままではとうてい精神を鬱<sup>(?)</sup>からすくひ出す事はおれの力じゃとうてい望まない。何か知ら慰がなくは行きてる甲斐もない。思煩ふな。死にさえしなきやよい。狂気にさへならなきやよい。生きてさへるりゃよい。頭が昏くなるこれは可なり苦痛だ。

le23 (samedi) ボロviolonだ。50francsでviolonを買ってくる。馬鹿何時奏けるといふのか。おれには何でも破れたものよりは与へられないらしい。恐らく何人よりも修理と整備感を好む男なのに。事々に心が傷られる。これでも出て行けないとはよくよく餓えるのが怖ろしい上によくよくの能無しに出来てると見える。

le24 (dimanche) 朝主人がやって来て今日は出るから下女をカン督してくれといふ。カン督といっても仕様がなくていふ顔をしてると台處の方へ何か用のある様な顔をして時々行くのだといふ。おれは笑ひながら対応してる。腹ん中ではつぶやいてる。《此モーロク爺、ローマ皇帝マーカスを見損ったか。此おれが探テイや獄吏の真似の出来る人間かい。悪い事したい奴なら勝手にやらしておくがいい。又それが心配なら何で遊びに出て行くのだ。又カン督しろたって物置の中に犬の如くに眠る人間に何の権威を認めようぞ。おれに地位を与へるなら物質上にも待遇を改めつばなるま

い》と。主人はあの下女は何をするか分らぬ気狂だからといって行く。おれはおかしくてならぬ。さういふ御前も狂気だ。そしてここにもっと偉い狂気のあるのに御気がつかぬか。とに角此處は狂気屋敷だ。

le25 (lundi) どうせ馬鹿々々しいに決ってる。それにしてからが時には等分真面目な気持でなくては魂が枯死する。今の暮は余りに悪い。冷笑とヨイ加減にやっておくといふ気持と時に烈しい *malicieux* な心を感じる。怨恨や後仇感などといふものは決して愉快なものじゃない。

le26 (mardi) 自由を思ふ意念が烈しく動く。Marseilleの *nout Damek* に立って海を眺めた気持が廻想せられてならぬ。Hélèneもどうでもよい。おれは女などからいい目をするようには生れてはせぬ。海や空や草や木を相手にしてゐるのが一番容易だろうじゃないか。何故とも知らない。涙が流れる。まことの事——あるかないかは知らないが——少くも真実らしいものをばげしく求める。草の上にあふして——孤りで沢山だ。海を眺めたいぞ午後休みをとって *Musee Rodin* を見る。一向に感じない。両性のショック接をとりあつた小品が沢山あつたが余り好ましくなかった。Rodinの魂よりも女の方に心が傾いてたのだ。青山君と夜は女を見に行く。これも何でもない。要するに只々一休息したいのだ。Muséeの窓から見た庭と空が一等心地よかつた。

le27 (mercredi) Raddaから手紙がくる。心が空虚で何とはなし甚しく淋しい時なので大変に動される。返事を可く。

le28 (jeudi) 昨夜日置先生がマルセイユで帳面方の口があるといふ。此先生はどうも少うし賢くないらしいので冗談半分にたのんではおいたが、しかしいよいよ他に何にもないとなりゃ行ってやらう。どうせ駄目と決つてようがとに角書く又は書いておかうといふので *Mme Lara* に書く。日本人は耐らない。その上に商人とくるといよいよ耐らないから、どうも言葉の事を想ふとガッカリする。午後客を案内して *Musee Rodin* を訪ふ。矢張やってる。偉い奴だと想ふ。帳面方も耐らないが耐らない方まだよい。宿引なんか楽にやれては危いぞ。危いといふ事に気のつく間はよいが。よろしい。談によつてはMarseilleへ行くぞ。

le29 (vendredi) 早くおこされると一日うっとしい。心が只憂悶する。ちつとも進まないとい

ふ此気持が忍びがたい。行くては実に遙かだ。しかもおれはすでに道にぶつたほれてる。偉い奴はどこ迄も望を失ひはせぬ。どうしても歩みを止めはせぬ。又小りコーな奴は何事にもよい加減に見切をつけて生を厚ふするに足る道をとって行く。おれは其いづれにもゾクしない。悲しい事にはどうてい望はない。それかといつてリコーな人間の真似をせうたつてこれも其資じゃない。一等馬鹿な一等哀れな悲劇役者だ。よろしいMarseilleへ行け。たほれるなら其方楽だろうじゃないか。

le30 (samedi) 心の渴く事は激しい。石川から手紙がくる。可哀想に。夜客と女部屋へ行く。どうも只肉感丈ではつまらない。

le31 (dimanche) 心が着着かない。Marseilleの話があるからだ。何を求めるのか心が怖ろしく騒がしい。実際 *sérénité* と *contemplation* に越す悦はあるまい。おおしかしこれとても疑もなく *la vie est dure* だ。しかしさう考へてばかりゐては余りセチ辛過ぎる。屋根に雨の音がする。ベルレンヌじゃないが何とはなし物淋しいな。心のどっかで何か知ら求めてる。 *vérité sincérité contemplation* どうもかういった感が矢張一番ほしらしい陰天で雨ふる。心も昏い。かういふ時には孤りゐて勝手に考へてゐたいものだ。あらゆるいとしものを心に呼かへしたい。親も兄妹も友をも忘れてより久しいものだ。これは決してよい事じゃない。金もどうてい溜りはせぬ。言葉もどうてい駄目だ。只生きてこれではといふきりだ。よろしいMarseilleへ出ると決めろ。児島氏に書く。

#### Septembre

le1 (lundi) 夜Operaを見る。おれはどうも芝居といふものには余り風情のない男だ。Thaisだの本を読んだ方余程面白い。尤も心が怖ろしく冷くなつてから、*illusion* を起す余地が少しもない。第一紡績工場の職人や帳ツケなどといつしよにOperaへ行くといふのから間違つてる。日本人といふ奴は汚いな。ここも去る方賢い。

le2 (mardi) *gare de Lyon* へ客を迎ひに行く。どういふものか身心共に怖ろしくだるい。例のおれの支配者たる衝動が猛然として起きて来た。よろしいぶち破れ。何も可も耐らない。

le3 (mercredi) 不愉快なる事おびただしい。糞何か言つて来やがれと思つて勝手にやつてやるが何とも言ひやがらない。 *pauvre diable*。既に早

くMidiの海岸でふつたほれる夢想でふるへ上つてやがる。手前は實際生れ時と生れ處がわかつたのだ。何も可も思断て。写真が出来て来た。情ない面してやがる。番頭なんかするからこんな面になるのだ。 *Mme Radda* に書く。夜又書く。 *Mlle Paule* にも可く。

le4 (jeudi) RaddaにPauleへの手紙を<sup>(77)</sup>托する。何でもいひや *Mlle Paule* は初っから気に入つておれの名文を見せる事が出来りゃそれでよかろうじゃないか。山下氏へも可く。

le5 (vendredi) 主人に出るといふ事を話しておく。 *Russeport* の用で大使館へ行く。 *Monceau* 公園をぬけてかへる。子供はどうしても心地よいな。さていよいよ出る事に決つたがローマ迄一息か南岸でまごつくか一寸決らぬ。どっちにしても又決死隊か。情けないな。

le6 (samedi) 杏氏に可く。どうもタイクツで耐らない。一寸長谷川の處へよつた。例の女がゐる。可愛ゆらしいな。さてここは出る事には決めたが出るとなるとも耐らないな。しかし金の問題には一寸閉口するぜ。

le7 (dimanche) 午後婆さんに言つて暇をとつて中原を訪ねる。ぬない。中原の女といつしよに *Viewcourt* 迄行つてくる。水辺の樹陰で憩ふ。久しぶりの気持だ。かへると爺が文句をいふ。ここもつくづく飽きたな。

le8 (lundi) 退屈なる事おびただしい。ものうい。中原から貸りた本を読む。どうも祖国の廻想は気持がわるい。餓えてもよい。出ると決ると、とても我慢がならない。心の昏い事はどうだい。 *Mlle Paule* にあの手紙は渡されたか知ら。 *Mme Radda* からは何とも言つてよこさぬ。今ここで考えると *Académie* の記憶も悪くないな。 *Paule* の手を握つた時は一寸意外だつたな。おお *Irère* の野の花を見て *Hélène* を想つた。今度はMidiか *Italie* で *Académie* の連中でも考えるか。時の過ぐるをのみまつたがとても此調子じゃ故里の海を見得る迄はむつかしからうぜ。しかし長谷川の女友の言つた様に *Cel mort* だ。Midiの海岸かローマの廢墟かでよい加減に御暇するさ。何にしろ早く出たいな。何にも手につかないじゃないか。 *Italie* と言つてからがどうてい其旅費はこの爺からは出さうもないぜ。 *Nice* 迄なら少うし我慢しさをすりゃ何とかならう。最後の處は *Nice* と決めて、一つおちついてもっと楽に暮さうじゃないか。

le9 (mardi) Raddaの手紙がまたれる。Marseilleの番頭さんの口は駄目だといつてよこす。あの馬鹿などの世話などにはならない方よい。どうも此世はきらいじゃないな。何とかして矢張とつついてゐたいぞ。

le10 (mercredi) 徒勞と知つてからが、思ひついた事はやつて了はないと気がすまない奴だ。 *le matin* へ広告を出しに行く。 *commissaire a visa* がいるといふのでとりに行つてくる。

le11 (jeudi) *le Matin* へ行つて広告をたのんでくる。懐は淋しくなる。主人の心とは離れてる。客は来ない。少々心細いぞ。地中海の畔でオリヴの樹の下に眠るのもいとはないがParisから徒歩で出発の勇氣はどうていない。せめてはMarseilleでAnnaでも見て、歩くにしてもそれから後にねがいたいぞ。

le12 (vendredi) Midiかローマかアルゼーかおれの心は惑ふ。それにしても金があるかい。マルセイユでせめて二三日は滞在して *Hélène* にも会ひたからうじゃないか。Annaでも見たからうじゃないか。焦るな。しばらく我慢して大人しく働いてやれ。せめて三百フランがものはなくてはなるまい。淋しいと慰がないと。どうせありはせぬ。食へればいいじゃないか。言葉を覚えろ。本を読め。

le13 (samedi) どうも退屈で耐らない。だるくて仕方がない。希もなければ気力もない。午後どうとう寝台をひろげていつの間にかうたたねして了ふ。覚めてからの不愉快な事は。少うし前の日記を讀んでみる。 *pauvre diable!*。懸命になつて金ためると力んでやがる。手前の期待する處はいつもかうだ。金がたまつたから出るといふのか。馬鹿。とても駄目だから飛出せといふ事になつたじゃないか。それにしてからがどうだ。いよいよ汽車賃すらがないじゃないか。代りの奴は何時来るのだ。十五フランで何が出来るか。まてまて無駄とは分つてゐても *Matin* へ広告が出て後一週間は待つて見る。Raddaも *Mlle Paule* への手紙を持込まれて閉口したと見える。二十日過迄はどうしてもみてやれ。どうも困つたな。もう出たくて仕方がない。心が無暗とかけ出す。今日無か喰ひっぱぐれが来たらしかつたにどうしやがつたのか。せめて代りの奴でも早く来ればよい。しかし先生このままではどうする事も出来はせんぜ。何だと。道旁へぶつたほれるに何の用意がゐるかい。よろしい利徳をとらうとすると無理がおきる。どうせ

何もかもとうてい望がないとすりゃ眠る處が在って喰へる間にもっと勝手にやってやれ。しかし今若しおれがもっと賢ければどういふ風にやるか。どんな考も皆無益だ。どうしたって決して賢い気づかいはないのだから。

le14 (dimanche) 朝から怖ろしくものうい。気力も何にもない。手紙がくる。誰からかと想ひながら開いて見ると青山先生だ。汚い絵を描いている。胸がわるくなる。友ばかりはほしいな。理解といふものはうれしいものだ。ここいらの奴原に何でおれの心が分るか。何とも言へないいやな気持だ。今一週間我慢しろといふ一方かけ出せと焦っている。結着がつかない。只ものうい。いつ迄も眠ってみたい。余りタイクツだから、Mlle Lucienneに手紙を可く。それを出しに表へ出るとさあキレイな奴にぶっかる。世の中一時に明るくなったような気持だ。しかし考えて見ると又ガッカリする。高が引張だらうじゃないか。それすらがどうする事も出来はせぬじゃないか。どういふものだらう。此うちへは入るともう死人見たいになって減入りこんで了ふ。何にしても懐中十フランの余ではどうする事も出来ないな。さすがのおれも減入りこむのも無理はない。いくら何だって巴里から徒歩で出発の勇氣はないからな。いよいよおしつまりやがった。其上に又意地わるく客はちっとも来やがらぬ。爺にぶつかったとてとても見込もありそうにはないぜ。どうもサッパリ世の中面白くないな。どうかMarseille迄の旅費の出来る迄一つ辛棒してくれたのむぞ。何ともいへず悩ましいな。何等の慰藉もない。安息感がほしいぞ。consolationといふものはどうしても必要だ。何の為に生きてるのだと心が泡をふいて怒ってるぜ。少々此項陽気が暑い。それでちと逆上した所為もあるのかも知れない。とに角おれは時には木や草や空や海を見て暮さなきゃ耐らない。心の冷い時には實際世には何にもない。しかしどうだい馬鹿な奴だ。どういふものか、今夜は心和いだ。Mme RaddaとMlle Lucienneとの手紙を出して見ると怖ろしく親しい感じがするじゃないか。何といふ御天気の変りやすい奴か。しかしこれだから生きて行かれるのだから。

le15 (lundi) 午後半日の暇をとって廣瀬氏を訪ふ。いっしょに出て兎島氏を訪ねる。かへるとつくづく自分の仕事が情ない。皆拙い絵を描いてやがる。それでゐて人間並に暮してやがる。人々

の中へ行ってくるとどうにも世の中が恨めしくなる。よろしい出かける。いくら人が恋しくとも孤りであるより仕方がないようにし<sup>(つ)</sup>へ。Luxembourgから歩いて行ったがRaddaの近くへ行くと見たかった。Academieへもよって見たかった。実際人々の中へは入るといけな。おれの信ずる處は殆ど絶対だから。そしてたいていの奴は随分おれとは異ってるからさうすると非常な不快感をうける事になる。厄介な奴だな。

le16 (Mardi) つくづくいやだな。

le17 (mercredi) 実際呉服屋や材木屋や海軍の監督だなどといふ手会を見てても何にもなるものじゃない。よろしいRomaへ行け。世の中の事は皆思ひき<sup>(つ)</sup>つ了へ。周囲にいくらかの温情か何らかの慰藉かなくてはやりきれものじゃない。これでは余りひどいぜ。RaddaもLucienne嬢もとうとう縁切か。Raddaは可愛らしいな。友としてよい女でどうでもいっしょにいたいといふものじゃないが、若しあれでどうにも好きな女であれ丈にやさしくされればあんな貞主などどうでもよい直ちに飛込むんだが。糞！。何も可もすぐ失くなるから憤激してかけ出す奴だ。無念だが仕方がない。よろしい乞食女か泥棒女でもよいAcademieの記念などほう<sup>(つ)</sup>つ了へ一気に入った奴を探してめぐろう。野郎なんか一疋も入らないがとに角女丈はどうしてもゐる。

le18 (jeudi) とうにも何にも手につかない。只もう焦慮する。

le19 (vendredi) どこからも何とも言ってよこさない。一体Raddaはどうしたのか。Paule嬢への手紙はどうしたといふのか。何だか少々世の中の余りもの見たいな気持がするぜ。実際余計者かも知れない。余計者ならそれでいい。その様やってやるぞ。ここのヨク爺ヨク婆をとっぴどい目に会はしてやらうと思ってるが、今朝孫娘のタン生日の祝に絵ハガキを書いてやってくれと爺がいて来たので一寸角が折れた。どうもグラスがない。可哀想な奴だ。悪党なら矢張生れついて来なくては駄目だ。いつも他を罵って馬鹿がいくらもがいてりコーにはなるかいと言ってるが、それが本当なら、今更偉い悪党にも早変りは出来はせぬ。とに角とうてい頑重じゃない。しかしマーカスなどは止めたいな。いつも損ばかりしてはやりきれない。糞此おれをAtelier Pormonで素裸に立たしたりOdéonで猿の如くに踊らせもした。今

更体面も何も要るか。乞食でもヌスツでも何でもやれ。RodinやRenoirがどうあらうと今更おれが彼等にもなれまい。よろしいおれに在るものでやり切ってやれ。只長生したとて何になる。又したくても此工合ではとうてい六ヶ敷い。ぶち破れ。又Sacré Coeurの高台に登る。小雨降って風は寒い。まるで冬の気持だ。旅の心を感じる。

le20 (samedi) Mme RaddaとDaily Mail社から手紙がくる。広告の反響があったのかと想ふとさうじゃない。RaddaからはPaule嬢へたのんだ事は無効だといってくる。此頃はとてもいい事はないものときめき<sup>(つ)</sup>てるから何事にも驚きはしない。しかし沈んだ気持は拂ひ得ない。それに寒い。何とはなし心淋しいな。寒いのは嫌だ。何だか出るのもオック<sup>(つ)</sup>ーになってきたぜ。おれは只嘆息する。

le21 (dimanche) annonceを見た可ら一寸やって来い言ってくる。又何かウルシか何かの口じゃないかと思ふが、annonceはとに角Midiの方でVillaで働きたいといふのだから事によると何かよい口があるかも知れないと思ふので、又兎島氏へ行っていっしょに行ってくれるようにたのみに行く。支那食をよばれてかへる。さて明日はどうか。どうかAlgérieへでも行けるような事にでもなればよいが。しかしもう何事も期待はしないぞ。

le22 (lundi) 朝兎島氏をたのんで出かける。案の如く壁へ何かかくのだといひやがる。その又おやちがいやな奴だ。これが二十一フランの結着だらう。よろしいMidiへ行ってくたばれ。Academieへよって一寸のぞいて見る。おれの裸を見やがった奴等がゐやがる。こんなつまらない處すら既におれには封ぜられたる處かと思ふと憤恨感でいっばいだ。

le23 (mardi) どうにも懐中十五文じゃ仕方がないぜ。頭がおそろしくうっとうしい。午睡する。どうも寒くていけない。今からこれじゃとても冬は越せないぞ。よろしいもう投出さう。しかし此月中丈は辛棒しろよ。どうしてもMidi迄はこぎつけろ。

le24 (mercredi) 今朝も又サッカリンを持って来ない。つかへして眠ってる。爺が我鳴りこんでくる。どうも言ひ負けるのでくやしくなってすふ。もうとっくみ合をやってやらうかといふ處で婆が戸を閉して鍵をかけやがった。誰がアンスーなんか持って出て行ってたまるか。晝飯後サロンへよんで、煙草代だと言って二十フランよこし

た。矢張年寄の方かしこいな。馬鹿々々しくもあるし情ない気もする。来月五日迄といふ事にしておいた。それ迄に二十フラン位のものとはたまらう。それと爺が百フランもよこすかな。何にしてもMidiへは行けるだらう。それでよからうじゃないか。想煩ふな。おれは帰りたい。しかし親や叔父達の生きてる間ではいやだ。早く哀れな両親が逝けばよい。しかし何にしても土産がない限りは可へれるものじゃない。全く死んだ方楽だ。いつも此考から脱る事が出来ない。気持がわるいな。頭がへトへトになってやがる。慰を想ふ事は非常だ。

le25 (jeudi) どうももう去ると決めると心がおちつかない。いつ迄も賢くならない奴だ。どういふものか心が恐ろしく冷たく物寂しい。大使館へ行つたかへりに公園をぬけて女の子供達を見たが駄目だ。何でも恐ろしく疲れてるらしい。

le26 (vendredi) 街樹の葉も色づいた。今年の秋は馬鹿に早いような気がせられる。何とはなし怖ろしく物寂しい。Raddaから手紙をよこす。とうとうRadda一人きりだ。幾枚かのクロッキーとRaddaを識つた丈が二ヶ年近くの間の収獲の総てか。おれは嘆く。France迄材木はこびや宿引の修業に来たのじゃないぞ。土産もなしに哀れな親兄弟に面が合せるか。そんなら其土産は何時出来るといふのか。おれは死を想ふ。弱い奴にはこれが一番安らかな道だらう。おれは寒さを何よりも恐れる。それにMarseilleの廻想は惨痛だ。うす寒い風が吹くとおれの心は裸上つて了ふ。

le27 (samedi) 朝gare de Lyonへ行つたかへりにBernheimの表でRenoirとMonetを見てくる。どういふものか大変気持がよい。宿引をやめると決めたので感官がさめかかったのだらう。よい絵といふものは心地よいものだ。Raddaを想ふ。昨日の手紙は大変におれを動かす。彼女を想ふと涙ぐまれる。心が何とはなし慄へる。祖国を去る時に土喰ってでもやれるといった先生を想出せ。このまたほれてどうなるか。乞食だとかもう事か。何が来ようと決して死ぬな。仕事をしないでどうなるか。仕事をしないで何處へ行けるか。老年の様を想へ。静かに世界を眺め得る時は必づく。Radda丈は信ずる。よろしいおれはとうていエライ奴じゃない。女の問題で勇氣が出たり引込んだりするのは残念だ。しかし事實を撒無せうようもあるまい。おれは彼女のnaiveな心を信ずる

昨日の手紙は恐ろしくおれを慰め気力を新たにす  
る。

le28 (dimanche) 客の案内でMusie Redinを見  
る。いつ見てもやってやがると思ふ。あの庭は美  
しいな。此頃は、どういふものか大変に感じる。  
l'artといふものは矢張いいな。Marseilleへも  
とうとう行けるな。汽車も楽しからう。海が見える  
ぞ。Helénéも事によると見える。どんな事があ  
っても生命丈はもちこたへろ。国へかへって寂しい  
海でも描かうじゃないか。Mme Radda.彼女にMme  
とくつつけるのはいつにも不似合の気持がする。

le29 (lundi) おれの唇を誰か可愛らしい奴の  
唇の上へおしたいぞ。淋しくて耐らない。

le30 (mardi) 午後Louvreへ出かけてMonet 其  
他を見てくる。夜Lonisetteを見る。何ら知ら少  
々もう何もかも厭になったぜ。

le1 (Oct mercredi) ボンベイから竹村が死ん  
だといふ消息がくる。こいつは一寸弱った。あいつ  
がくれば馬鹿相手の道具には一番いいおれも  
味方が出来て淋しいのも大きに助かるのに。印度  
洋上で誰にも看られないで死んで了ったのじゃ可  
哀さうだな。何となく情ない。客の察内でVersa  
illeへ行く。これが客でなく竹村なら二人でどの  
位はしゃがうと思ふ。夜客とOlympiaを見る。

le2 (jeudi) どうもいけない。竹村が魚の腹を  
肥したとすりゃおれは並樹のコヤシの番だ。秋風  
がどうも悲しい。海や山を想っても余りに淋しい  
物柔しい心にくるまれて半睡の態でも暮したい  
ここは何といふ處だ。しかし出て野へ眠ったら何  
か慰があるといふのか。おれは世のもっともか弱  
い心の持主だ。そいつに体何をやらさうといふの  
か。どうもいけない。竹村を想ふとどうも他事じ  
ゃない。おれも死ぬ時はせめて暖かい寝台で誰か  
やさしい奴にみとられながら逝きたいものだ。ど  
うも心細いな。これすらも危いぜ。もう何も可も  
イヤになって我慢の根もつきた。もう投出せ。無  
理にイヤな目をして柔しい心などしほり出すには  
及ばんぞ。

le3 (vendredi) 午後出かけて絵具箱をとって  
くる。青山を訪ねる。いっしょに夕飯を喰ふ。

le4 (samedi) 行かう行かう。おれは人足じゃ  
ないぞ。もうよい。喰はないで座っておれ。余りつ  
まらないものばかり見すぎた。実際飽きちゃった。

le5 (bimanche) いよいよ明日の夕立つときま  
る。何にも望はない。只一日ゆっくりと眠りたい。

それすらも事によると許されまい。寒さがいやに  
心を重くするぜ。

le6 夜巴里出発。

le6 放たれたといふ感じもなければ何の新しい  
嬉もない。今度こそは危いぜ。どうでもいいじゃ  
ないか。午後Melieを訪ねる。AnnaよりかMelie  
の方どっかに人のよい處があつてよい。

le8 (mercredi) visaをすっかりすましBergir  
爺さんをたづねる。午後Palais Longchampを見に  
行ったが閉ってる。Melieのお袋をたづねる。夕  
波止場を散歩する。夜女を探しに行く。実に立派  
な奴をとっつかまへる。見事な顔をしている。し  
かしどういふものか絵の材料として眺める心で馬  
鹿になった気持になれない。Melieの方にむしろ  
親愛感が多い。しかしたしかに見事な奴だ。

le9 (jeudi) 女が側<sup>(つ)</sup>にゐる時には何でもない。  
しかし今朝は怖ろしく心がさわぐ。Italieなどへ  
は行きたくない。何とは知らず深く此世を愛する  
気持<sup>(つ)</sup>で怖ろしく悩ましい。行きたくも何ともない  
がMarseilleにもゐられまい。三時半の汽車で立  
つ。

le10 (vendredi) 終日汽車だ。眠れないので可  
なりに疲れる。夜は停車場で明す。

le11 (samedi) 大使館を訪ねる。中村といふ彫  
刻家がある。此人に三十リラを与へられ夜Napoli  
に立つ。Romaは何にも見ない。

le12 (dimanche) 午前Napoli着。途方にくれる  
とは此事だ。どうにも耐らなくフランスが恋しい。  
まだどうにも生きてみたい。おれの様な奴のゐる  
余地はとともないと分つてゐてからが死にたかな  
い。アキラメの悪い奴だ。どっか横はる草原がな  
いかと西の方の岬を一巡りしたが何處にも見つか  
りはせぬ。かなり疲労する。もう一思にとも思  
ふがどうにもフランスが恋しい。また死んで了  
つては何にも見られはせぬ。死ぬにしてからがも  
つと見てやれ。死はむしろ容易だ。只しかしせめて  
床の上で病気で死にたい。餓えて地上にたは  
れるのは余り情けない。別して寒い目をするのは  
耐らない。思考力が甚しく困乱してる。夜不良少  
年見たいな奴の案内で宿をとる。夜街でviolonと  
マンダリンの流しを見た。おれはviolonを海へほ  
うり込んで了つた。おれのviolonじゃ流しなんか  
にはなりはせぬ。

le13 (lundi) 朝道行く人にきき合して下井氏を  
訪ねる。日本の船が入ってくるからそこへ行けと

いって手紙をくれる。晝飯をすまして今デッキで  
これを書いてる。そりゃ生きたいさ。しかしもう  
たほれてもよい。なるべくならフランスでやりたい  
がここでもかまわない。ましかし今日一日とい  
へども生きてる間は恰んで暮す事だ。Napoliは悪  
い處じゃない。かくしてデッキで海を眺め勝手な  
事を考えてりゃ楽しからうじゃないか。おれとて  
も生命は熱愛する。恥を忍んで郷国へかへつてで  
も生きてる方本当かも知れまい。しかし今頃かへ  
る位ならむしろ死をとつてもこちらに止まる。イ  
タリーをナポリ迄やつては来たが其あわただしさ  
はどうだい。ローマにつきながらシスチンの壁画  
すらも見られなかった。何といふ間拔な奴だ。こ  
こでたほれるとすりゃ全くイタリアへ来たのは無  
意味だ。馬鹿な奴だ。喪心してる人間に何で芸術  
が味はれよう。生きてる間にイタリアを見る。そ  
りゃいいさ。しかし何が見られようぞ。ローマで  
は決して居心持よくはなかった。見事な建築はお  
れを甚しく壓迫した。おれには今実際芸術も何も  
要らなかったのだ。厳烈な精神も何もいらぬ。只  
々安静丈がほしかったのだ。柔しいものでくるま  
れる事只それ丈の他には、何の希もなかったのだ  
今イタリアへ来るのはまちがつた。むしろたほ  
れるにしてからが南フランスでやるの方本当だ  
つた。仕方がない。何でも来い。甘んじてうけるぞ  
腹がすいて眠る處もなきやとておれは貴族だ  
などと力むでみられはせぬ。世界一の貧民だ。何  
でmagnifiqueなaristocrotiqueな仕事など味ふ余  
懇があるか。しかし餓えても昂然としてシスチン  
の古壁を睨んでつ立つてみられればおれもかく  
迄不自由はしなかつたかも知れまい。おれはいつ  
も怖ろしく淋しい。もし誰か見てくれる人間があ  
れば何時でも死ぬ事が出来る。おれはamitiéさへ  
在れば他のたいいていのものはいらぬ。おれはこ  
こでたほれるといふ事に就て考へる。恐しいが死  
はたほ<sup>(つ)</sup>忍ぶ。只一人誰からもかへり見られないで  
逝くのはおれの性情としてはとうてい忍びがたい  
又一思に早くやるのもいやだ。おれはどうしても  
他との交渉がなくはとて淋しい。餓えるか或  
は放血をやるかだ。そして人間のうちでやるぞ。  
そして誰か一人おれに対し憐憫の心をよする奴を  
見出し得ればそれでよいのだ。見ろ。とうとう精  
神上にも全くの一乞食だ。

le14 (mardi) 午前下井氏を訪ねる。ゐない。  
おれはもう他との交渉などともものうい。とに

角おれは喰ふ為の才能のない奴だ。喰ふ丈のもの  
位はあるべきように出来てる奴だ。此ままではと  
うてい見込はない。実際もう疲れきってる。何に  
もしないで食はなくともよい。只じっとしてゐて  
女の事でも考へてゐたい。生の執着感暑苦しい。  
弱者のabriには相違ないが思ひたつた気持は反  
つて楽だ。Marseilleでは心悩ましかつた。怖ろ  
しく淋しい。それでゐておれのほしいものの裡で  
なければむしろひとりてゐたいといふ奴だ。こ  
こをきりぬけて一先づAlgerieへ逃れようと思ひ  
たつ。少しく気力をもちかへす。夜垣戸氏に手紙を  
可く。

le15 (mercredi) Musée Nationalを見る。Pom  
peiの画も悪くはないが。実際の處おれには今生活  
そのものが一番重要なのだ。何よりも安静の暮し  
がほしいのだ。少うし適当な處へおちつきたいの  
だ。

le16 (jeudi) Pompéiを見てくる。夜散歩する。  
何を見ても心が大きして嬉ばない。慰がない。淋  
しいんだ。生きてる張合がない。仕事の出来ないの  
が一等よくないのだ。仕事以外には決して何にも  
ない。

le17 (vendredi) 今の様な気持は決して本当じ  
ゃない。敗れたるものの心だ。常に心に光明を保  
持しうる迄こぎつけなくては偽だ。よく知って  
る。しかしとうてい難いな。Vesuvioに雪がおり  
た。寒い。しめやかな心を感じる。郷にかへつて  
日南ぼっこでもすりゃ楽だとも思ふ。夜表の連中  
についてvariétéを見る。極めてつまらぬものでも  
大変に面白いのだ。世には楽しいものはいくらで  
もある。おれとて生きてゐたいな。少うし丈よい  
職がほしいな。Algerへ行け。そして矢張生きて  
るようじゃないか。生存の為の煩ひの為にcontem  
plationの悦に入るの暇がないとは何たる事か。  
見ろ。夜は静かじゃないか。

le18 (samedi) 下井氏を訪ねる。大使館からと  
に角ローマ迄出て来いと言つて来たとの事だ。よ  
ろしいとに角ローマ迄行ってアルゼリー一行の談判  
をやらう。夜ナポリを立つ。

le19 (dimanche) 朝ローマ着。大使館へ行って  
書記官に会ふ。午後は方々をぶらつく。夜は大使  
館のソファの上に眠る。

le20 (lundi) 絵具を買ひに行く。酒を買ふに足  
りない。シスチヌを見に行く。RaphaëlもMiche  
langeも悪くない。しかし先づおれの生活が先だ



又他の絵はいくらよいものを見たとしてそれでもうよいといふ訳のものではない。少うし静かに暮し何か描いて見たいものだ。

le21 *Clande* の水道を見に出かけて *Alban* 迄行ってふ。絵は出来ない。

le22 (*mercredi*) 雨ふる。 *Galliria Borghese* を見る。午後方々とまごつく。夕やっと一枚ぬる。注文の絵といふものは出来る事じゃない。外交官補の家に泊ってる。八時頃迄はかへれないので閉口だ。

le23 (*jeudi*) 陰天だ。仕事がない。絵具箱を可ついで出かける。とてもこんな態じゃ駄目だ。描いたとして出来はせぬ。とても注文の絵は出来る事じゃない。書記官先生も一寸閉口してるらしい。もう尻を上げよう。明日は準備に可からう。 *Alger* 迄こぎつけ得るかどうか。又マルセイユか *desse* もよいが二度は感心しないな。

le24 (*vendredi*) フランス領事館へ *visa* をとりに行く。明朝やって来いと事だ。仕方がない。午後又絵具箱をもって出かける。雨がやってくる。コロセオの石に腰かけ *Radda* に手紙を可く。どこへ行くのかわからないがもう出かけたいな。以前には希望があった。行く的が在った。處が此度はどこも行く處がない。世界中におれの居る處はないといふのだ。寂しいな。いよいよ懐中も淋しくなってきた。煙草も可へない。空腹だな。

le25 (*samedi*) 今日は一日 *passeport* の *visa* をとるのに可かる。さあ明日は又汽車か。何處へ何をしに行かうといふのだ。 *Alger* へ迄行ければよいが、今日の話ではそれもむつかしいらしいぞ。

le26 (*dimanche*) 午前イタリ警察署の *visa* をすませます。大使館へよって、金を貰って出かける。 *station* の *Buffe* で午飯をすませます。之の金の金は *Alger* 迄は行かれはせぬ。不安は非常のものだ。もう *compatriote* 相手には精根がつきてる。又今一度 *Marseille* で苦痛を忍ばなきゃならぬかと想ふと死よりも恐ろしい。悔恨感是非常のものだ。ぶったほれて声上げて泣きたい位だ。しかし *Radda* の邦迄はどうしても行くぞ。悲しくてもいいじゃないか。生きてる証だ。悦びにこした事はないが——。夕 *Roma* を立つ。

le27 (*lundi*) 又汽車だ。窓から眺めるとキレイな花樹園とささやかな住心地よささうな家とがある。おれには家がない。 *Marseille* もいいが恐ろしい。途中写生でもしながら行ってやろう。いよ

いよとなれば故国の親父に最後の金を出さしてやらう。おれとて人間一疋だ。又 *Marseille* へ行って女神を見ないですまされるか。夜 *Ventumlle* に泊る。

le28 (*mardi*) 昨夜悦んだ気持はすっかり飛んちゃった。又胸がいたい。投出すといふ気持が一番楽だ。何も可く自由が在ってからの話だ。 *garcon* なんぞになってどうなるか。朝 *Cannel* につく。別荘地の感じはおれを怯<sup>(つ)</sup>グにする。もう人を壁けたい気持でいっばいだ。おそろしくおのを卑下して見られる。汚い衣装が非常におれを臆病にする。 *vagalonde* になってるのだろう。一切の幸福げなものに反感を持たれる。砂漠に行かう。 *Algerie* へ行ったとして恐らくおれの希はうらぎられるだらう。さすればたほれる迄の事だ。今日は長谷川の家泊る事にする。おれには、はかなげに見ゆる。世の多くの楽しげなる人々の幸福などは何でもない。おれはまことを求める。自由と真実。それはとうていおれにはとげがたい望だ。おれは眠るのが大変好きだ。おしつめれば永く眠るのも又きらいじゃないといふ事になる。しかし寒いのは耐られない。どうしても *Algerie* 迄は行きたいぞ。 *Marseille* を想ふと又借金を想ふと耐れない。

le29 (*mercredi*) *Cannel* はいい。空は美しい。ここでしづかに描けりゃどんなに可幸福だらうに。夕スケッチに出る。

le30 (*jeudi*) 餓えない。又夜は寢床に眠れる。今日一日と雖幸福だらう。夕写生する。どうも出来ない。おれは一体どういふ絵描か。おれには仕事は余りに困難だ。砂漠でたほれるといふ考へは矢張尤だ。絵描でも何でもなかったのかも知れない。

le31 (*vendredi*) おれもこんな處で楽しんでみたい。とに角絵は可ける。喰って眠れる。幸福だ。

# 1 主要行事

- 4月3日～4月25日……………昭和51年度前期県立近代美術館常設展
- 5月23日……………県立近代美術館友の会理事・評議員会
- 5月28日～5月31日……………長州路(萩・津和野)鑑賞バスツアー (県立近代美術館友の会主催)
- 6月3日～6月6日……………第3回移動美術館一橋本展(橋本市立文化会館と共催)
- 6月17日～6月28日……………第14回和歌山県美術家協会展(県美術家協会と共催)
  - 第1期=6月17日～21日<写真・洋画・彫塑・現代造形>
  - 第2期=6月24日～28日<生花・書・日本画・工芸>
- 10月9日～11月3日……………秋の特別展「木下義謙作品展」(県立近代美術館主催)
- 10月17日……………第13回和歌山県立近代美術館協議会
- 11月18日～12月6日……………第30回県展特別記念展(県教育委員会・毎日新聞社和歌山支局と共催)
  - 第1期=11月18日～22日<生花・書・日本画>
  - 第2期=11月25日～29日<写真・工芸・現代造形>
  - 第3期=12月2日～6日<洋画・彫塑>
- 11月18日～12月5日……………第30回県展特別記念展・歴代知事賞受賞作品展(於・県立博物館)
- 11月28日……………「ドカ展」鑑賞バスツアー(県立近代美術館友の会主催)
- 12月17日～12月19日……………第30回県展特別記念展新宮地方展(新宮市教育委員会が共催に加わる)
- 1月13日～2月13日……………昭和51年度後期県立近代美術館常設展
- 2月16日～2月20日……………第11回県立近代美術館友の会展(県立近代美術館友の会と共催)
- 2月26日～3月20日……………春の特別展「田中恭吉展」(県立近代美術館主催)
- 3月6日……………第14回和歌山県立近代美術館協議会

## 2 主催展覧会

### □ 昭和51年度前期 県立近代美術館常設企画展

会 期 4月3日～4月25日（毎週火曜日休館）

館蔵品を主体とする絵画（油彩画、日本画、版画）を展観

#### 出 品 目 録

1	石垣栄太郎	K・K・K	油彩・キャンバス	73.0× 92.0	1937
2	〃	恐 怖	〃	64.0× 104.0	1940
3	川口軌外	風 景	〃	65.0× 80.5	1924
4	〃	裸 婦	〃	91.5× 93	1927～1929
5	〃	花	〃	115.0× 88.8	1932
6	〃	光	〃	115.0× 80	1950
7	〃	森の中	〃	116.0× 95.7	1964
8	原 勝四郎	瀬戸風景	油彩・ボール紙	65.1× 53.0	1935
9	〃	小 湾	〃	70.0× 82.0	1940
10	〃	婦人像	〃	72.5× 60.4	1953
11	高井貞二	スリーサークル	油彩・キャンバス	131.5× 176.5	1967
12	〃	作 品	〃	137.0× 132.0	1962
13	保田龍門	村の娘	〃	83.0× 67.5	1915
14	〃	読 書	〃	65.0× 53.0	1921～1923
15	〃	裸婦群像	〃	130.5× 194.0	1926
16	ヘンリー杉本	FAITH LOVE HOPE	〃	162.0× 130.0	1966
17	〃	TENAMENT IN NEW YORK	〃	162.0× 130.0	1965
18	〃	LONGING	〃	162.0× 130.0	1968
19	国枝金三	卓上静物	〃	60.6× 72.7	1919
20	〃	麗 日	〃	90.8× 72.2	1939
21	〃	島の四月	〃	60.3× 80.2	1917
22	日高昌克	山峡池畔図	紙本・水墨	44.0× 56.0	1955
23	野長瀬晩花	スペインの田舎の子供	カンレイシャ着色・屏風	136.0× 110.0	1924
24	〃	五月の庭	紙本・着彩 (二曲単双)	77.0× 137.5	1961
25	小野竹喬	春の芽	紙本・着彩	45.0× 37.9	1972
26	長谷川利行	裸 婦	グワッシュ・紙	18.5× 18.5	
27	〃	工場街	〃	14.0× 21.5	
28	浜口陽三	毛糸とトリコット	エッチング	24.3× 51.9	1965
29	〃	19と1つのサクランボ	〃	23.2× 53.2	1965
30	吉田政次	静寂 No.1	木版・屏風	155.0× 78.0	1959
31	〃	相対性絵画No.5	〃	85.0× 182.0	1959
32	村井正誠	僧	シルクスクリーン	75.0× 56.0	1973
33	〃	太陽と鳥	〃	75.0× 56.0	1975

### □ 第3回移動美術館 橋本展

本県の地理的状況から広く県民に館蔵作品等を展観し、美術に対する関心の昂揚を図るため、移動美術館を毎年実施してきたが、本年度は、橋本市で開催した。（入場者 990人）

会 期 6月3日～6月6日 /会場 橋本市教育文化会館4階 第4～5展示室

主 催 和歌山県立近代美術館 橋本市立文化会館

後 援 橋本市 和歌山県美術家協会 和歌山県立近代美術館友の会

#### 出 品 目 録

1	野長瀬晩花	被布着たる少女	紙本・着彩	114.0× 134.0	1911
2	日高昌克	山峡池畔図	紙本・水墨	44.0× 56.0	1955
3	小野竹喬	春 芽	紙本・着彩	45.0× 37.9	1972
4	稗田一穂	流 翳	〃	162.1× 112.1	1962
5	亀井玄兵衛	みのり	〃	165.0× 122.0	1961
6	保田龍門	読 書	油彩・キャンバス	65.0× 53.0	1921
7	〃	村の娘	〃	83.0× 67.5	1916
8	〃	老婦人像	〃	66.5× 44.5	1921～1923
9	原 勝四郎	瀬戸風景	油彩・ボール紙	65.0× 53.0	1935
10	〃	画工像	〃	65.0× 53.0	1932
11	石垣栄太郎	スケッチクラス	油彩・キャンバス	56.0× 72.0	1947
12	〃	K・K・K	〃	73.0× 92.0	1937
13	木下義謙	肖 像	〃	116.5× 73.3	1928
14	〃	九谷の溪流	〃	91.5× 122.0	1945
15	川口軌外	ボヘミアン	〃	130.0× 96.0	1928
16	〃	日傘と人	〃	119.5× 89.6	1953
17	高井貞二	作 品	〃	137.0× 132.0	1962
18	〃	スリーサークル	〃	131.5× 176.5	1967
19	〃	赤い糸	〃	194.0× 73.0	1967
20	ヘンリー杉本	FAITH LOVE HOPE	〃	162.0× 130.0	1966
21	〃	モレー洗濯場	〃	90.0× 71.0	1964
22	木下孝則	A氏像	〃	52.7× 45.6	1949
23	〃	後向きの裸婦	〃	100.2× 80.0	1925
24	浜口陽三	ざくろ	メゾチント	29.2× 44.0	1958
25	〃	赤い鉢と桜桃	〃	47.0× 62.0	1866
26	吉田政次	空間No.50	木版・紙	45.0× 43.0	1965
27	〃	ミニとデモの時代No.1	〃	87.0× 72.0	1968
28	宇佐美圭司	「顔シリーズ」より	シルクスクリーン	74.5× 55.3	1973～1974
29	〃	「顔シリーズ」より	〃	74.5× 55.3	1973～1974
30	保田春彦	作 品	〃	56.5× 38.4	1971
31	〃	作 品	〃	56.5× 38.4	1971
32	村井正誠	僧	〃	75.0× 56.0	1973
33	〃	太陽と鳥	〃	75.0× 56.0	1975
34	保田龍門	仰臥女	ブロンズ	15(H)	1948
35	〃	鳩を持つ女	〃	81×23.5×22	1949
36	〃	うずくまる女	〃	35×22.5×23.5	1947

37	建島大夢	恩師の顔	ブロンズ	36(H)	1939
38	〃	お湯のつかれ	〃	66.7(H)	1913
39	小出樞重	淡路風景	紙・インキ	13.9× 19.8	1929
40	〃	淡路風景	〃	13.9× 19.8	1929
41	〃	淡路風景	〃	13.9× 19.8	1929
42	野長瀬晩花	水汲みにゆく女	紙本・着彩	52.0× 55.5	1926
43	〃	海近き町の舞妓	〃	30.5× 40.7	1926

### □ 木下義謙作品展

会期 10月9日～11月3日（毎週火曜日休館）

主催 和歌山県立近代美術館 / 後援 御坊市教育委員会 日高地方教育委員会連絡協議会 日高地方美育協会 和歌山県美術家協会 和歌山県立近代美術館友の会

郷土出身作家シリーズの一環として、現代洋画壇の重鎮である木下義謙氏をとりあげた。

木下氏の中央画壇への登場は、1921年の第8回二科展初入選に始まり、以来、制作発表の場を二科会・円鳥会・1930年協会などに求め、また、1936年の一水会創立に参画後は、今日に至るまで終始一貫同会と共に歩み、その精力的な制作活動は多くの人々の着目するところでもある。

本展覧会は、このような木下氏の画業の展開を跡付けることを主な目的としたものであったが、幸にもデビュー作である1921年第8回二科展出品作「兄の肖像」「兄と弟の肖像」を始め、近作に至るまで、木下氏の画業の展開を知る上において必要な作品をほぼ展覧し得た。

なお、木下氏の画業と並ぶもう一方の創作活動である陶芸については、参考までに11点を展示したに止めた。

#### 出品目録

##### 〔油 絵〕

1	兄の肖像	油彩・キャンバス	30 F	1921	第8回二科展
2	兄と弟の肖像	〃	6 P	1921	〃
3	画家の母	〃	6 F	1922	平和記念東京博覧会
4	読書の母	〃	6 F	1922	〃
5	同窓	〃	20 F	1924	第11回二科展
6	絵を画く小供	〃	12 F	1925	第12回二科展
7	少年の像	〃	10 F	1925	〃
8	横向きの婦人像	〃	20 F	1925	第13回二科展
9	N氏の肖像	〃	12 F	1926	〃
10	父の肖像	〃	15 P	1926	〃
11	横たわれる裸体の習作	〃	50 M	1926	〃
12	K嬢の肖像	〃	20 F	1926	〃
13	花	油彩・板	4 F	1927	四氏洋画展
14	M氏の肖像	油彩・キャンバス	30 F	1927	第14回二科展
15	車内のロシア軍人	〃	6 F	1928	パリ二人展 (1931)
16	肖像	〃	50 M	1928	{ 1928年サロン・ドートンヌ展 第18回二科展 (1931)

17	坐せる婦人像	油彩・キャンバス	25 M	1928	パリ二人展 (1931)
18	南仏風景	〃	6 F	1928	第19回二科展 (1932) 特陳
19	風景	〃	6 F	1928頃	パリ二人展 (1931)
20	カーニュ風景	〃	20 F	1929	第19回二科展 (1932) 特陳
21	横たわれる裸体	〃	20 F	1929	〃
22	婦人像	油彩・カルトン	6 F	1929	第41回アンデパンダン展 (1930)
23	アカデミー (男)	油彩・キャンバス	8 F	1930	第19回二科展 (1932) 特陳
24	アカデミー (女)	〃	12 F	1930	〃
25	屋外のダンス	〃	10 F	1930	パリ二人展
26	日曜日の公園	〃	100 P	1931	第19回二科展 (1932) 特陳
27	二人の裸女	〃	10 M	1931	〃
28	静物	〃	30 F	1931	{ 1931年サロン・ドートンヌ展 第19回二科展 (1932) 特陳
29	赤衣半身像	〃	30 F	1931	第19回二科展 (1932) 特陳
30	巴里郊外のシャトウ	〃	20 F	1932	第19回二科展特陳
31	二人の女	〃	50 F	1932	〃
32	ローマ風景	油彩・カルトン	2 F	1932	〃
33	ポンテヴェッキョ	〃	2 F	1932	〃
34	ポートセード風景	油彩・板	2 F	1932	〃
35	肖像	油彩・キャンバス	8 F	1934	第21回二科展
36	父の肖像	〃	30 F	1935	第22回二科展
37	横光線の肖像	〃	30 F	1935	〃
38	五月の金州	〃	30 F	1940	紀元2600年奉祝展
39	鞍馬峡	〃	30 F	1942	第6回一水会展
40	蘭川の水車	〃	30 F	1942	〃
41	葦原出口	〃	20 F	1943	第7回一水会展
42	妻籠風景	〃	50 F	1943	〃
43	葦原	〃	25 F	1943	〃
44	木曾谷	〃	30 F	1943	第6回文展
45	高冷地の農家	〃	80 P	1946	第8回一水会展
46	宣子像	〃	3 F	1946	〃
47	馬籠峠	〃	30 F	1947	第9回一水会展
48	倉知鉄吉氏像	〃	20 F	1947	〃
49	高木武氏像	〃	12 F	1948	〃
50	漆畑風景	〃	30 F	1948	第10回一水会展
51	大平街道	〃	30 F	1949	第5回日展
52	炭焼の家	〃	30 F	1950	第12回一水会展
53	寢覚の床	〃	10 F	1950頃	〃
54	下伊那風景	〃	50 P	1951	第5回美術団体連合展
55	みすずの貯水池	〃	30 F	1952	第8回日展 (日本芸術院蔵)
56	高遠風景	〃	30 F	1953	第2回日本国際美術展
57	月山	〃	25 F	1953	国立公園絵画展 (財団法人国立公園協会蔵)
58	水車	〃	30 F	1955	第17回一水会展
59	桜島風景	〃	20 F	1957	個展 (1958)

60	須原風景	油彩・キャンバス	30F	1958	個展
61	利尻島風景	〃	50F	1960	第22回一水会展
62	湖畔の木立	〃	50F	1960	第4回現代日本美術展
63	盛夏北京	〃	10F	1964	第1回黒門会洋画展
64	早春木曾残雪	〃	20F	1965	第4回一水会委員洋画展
65	礼拝する後藤師	〃	20F	1965頃	
66	徳原部落新緑	〃	20F	1966	第5回一水会委員洋画展
67	吸坂村道	〃	30F	1966	第28回一水会展
68	森林地帯緑陰	〃	100F	1968	第30回記念一水会展
69	湖畔の春	〃	50F	1969	第31回一水会展
70	宇部万年池ゴルフコース	〃	100P	1969	第32回一水会展(1970)
71	倉知善一氏像	〃	20F	1969	
72	九谷の溪流	〃	50F	1970	第32回一水会展
73	白い温泉街	〃	50F	1970	〃
74	アトリエの一隅	〃	10F	1970	個展(1971)
75	真夏の木曾	〃	100P	1971	第33回一水会展
76	三本岳の見える三宅島海岸	〃	50F	1971	〃
77	漆畑の家	〃	50F	1972	第34回一水会展
78	晴嵐	〃	100P	1972	〃
79	漆畑木工の家	〃	50F	1973	第35回一水会展
80	峠道よりの眺め	〃	100P	1973	〃
81	本山宿	〃	50F	1974	第36回一水会展
82	木曾風景	〃	50F	1974	〃
83	本山宿の家並	〃	50F	1975	第37回一水会展
84	白馬三山雪景	〃	100P	1975	〃
85	平出の泉	〃	50F	1975	〃
86	ベネチャ風景(復元画)	〃	20F	1932(復元1976)	
87	ベネチャ・カナルグランデ(〃)	〃	20F	1932(復元1976)	

〔陶器〕

88	銀杏文瓢型捻徳利	直径10cm×高21.5cm
89	九谷色絵寢覚の床図大皿	直径40cm×高7cm
90	染付錆色絵はまごう大鉢	直径46cm×高11cm
91	色絵九谷花文九角皿	直径37cm×高6.5cm
92	青磁裸女	幅7cm×高7cm
93	瑠璃藤浮文大皿	直径34cm×高4cm
94	九谷色絵花ざくろ絵大鉢	直径42cm×高8cm
95	釉裏紅瑠璃牡丹浮文手造中皿	直径22cm×高4cm
96	釉裏紅青磁花文中皿	直径25.5cm×高5cm
97	釉裏紅染付椿文中皿	直径26cm×高5cm
98	釉裏紅染付椿文九角皿	直径37.5cm×高5.5cm

〔資料〕

99	1928年サロン・ドートンヌ展出品目録	1928
100	1929年サロン・ドートンヌ展出品目録	1929
101	第41回アンデパンダン展出品目録	1930
102	1930年サロン・ドートンヌ展出品目録	1930

103	第42回アンデパンダン展出品目録	1931
104	木下義謙・雅子二人展ポスター(パリ、ギャラリー・ジャンヌキャステル)	1931
105	木下義謙・雅子二人展出品目録(パリ、ギャラリー・ジャンヌキャステル)	1931
106	1931年サロン・ドートンヌ展出品目録	1931
107	木下義謙編「マネ画集」(アトリエ社)	1933
108	「丹青」第1巻第3号(教育美術振興会)	1938
109	「ボオザール」第1号(雄鶏社)	1950

追加出品目録

〔油絵〕

110	婦人像	油彩・カルトン	3F	1928	
111	パリ風景	油彩・板	4F	1930	
112	パリ郊外風景	油彩・キャンバス	10F	1930頃	
113	西洋梨の静物	〃	6F	1930頃	
114	新緑のセーヌ川	〃	20F	1931	第19回二科展(1932)特陳
115	黒衣の宣子像	〃	12F	1951	

〔素描〕

116	婦人半身スケッチ	彩色・紙	27.0×36.5cm	1928	
117	アトリエの窓	〃	27.0×36.5cm	1928	
118	屋上(エスキース)	〃	36.6×27.7cm	1939	第3回一水会展
119	延安風景	〃	40.7×31.4cm	1963	
120	畷三彩亭氏像	〃	25.7×35.5cm	1973	

「木下義謙作品展」図録掲載年表の補遺と訂正

学芸員 三木哲夫

「木下義謙作品展」の図録に「木下義謙年表」(1976年8月31日現在調)を掲載したが、その後の追跡調査の結果、補遺と訂正の必要が生じたので報告する。

なお、今後も調査漏れの点に注意しながら、さらに追跡調査に努めたいと思っている。

\* \* \*

西暦	(年号)	行数	区別	事項
1910	(明治43)	3	一部追加	この頃、東京市赤坂区青山北町106番地に住す。
1923	(大正12)	7	訂正	小林徳三→小林徳三郎
1924	(大正13)	22	一部追加	「小鳥」「裸体習作」「静物」「画を見る人」出品(他の出品作品名不明)。
1925	(大正14)	27	訂正	池辺鈞→池辺鈞
1927	(昭和2)	10の後	全文追加	この頃までに、南紀美術会(1918年4月結成、建島大夢を中心とする和歌山県出身の美術家による団体、会員展開催事務所、建島大夢方)会員となる。
1928	(昭和3)	6と7の間	〃	同月、第5回円鳥会作品展(18日~22日、日本橋丸善)に出品か(作品名不明)。

西暦	(年号)	行数	区別	事項
1930	(昭和5)	4~5	訂正	「レオポン教会」→「ロンポン教会」
1931	(昭和6)	12	〃	「暖炉の黒猫」→「ストーブと黒猫」
1933	(昭和8)	16	一部抹消	「モンスウリー公園」(第19回二科展特陳)
		17~19	訂正	「ベネチャ・サンタマリヤ・デ・ラ・サルテーテ」(第19回二科展特陳)「ベネチャ・カナルグランデ」(第19回二科展特陳)→「ベニス風景」2点。
		19~20	〃	「チューレリ公園」→「チューイレリ公園」
		24と25の間	一部追加	「冬のモンマルトル風景」「アルジャン・リュウ風景」「巴里の画室の記念」
		25	訂正	「ランクレエ作四季の中秋」(模写)→「ランクレエ作四部作四季の中秋」(模写)
		25	〃	「ヴェロネーゼ作マウスの使徒」(模写)→「ペロネーゼ作エマウスの奇跡」(模写)
		26	〃	(他13点の作品名不明)→(他10点の作品名不明)
		34と35の間	全文追加	9月、アトリエ9月号(1日発行、10巻9号、アトリエ社)に文「セーヌ河」寄稿。
		39~40	一部抹消	10月、木下義謙同雅子個展(1日~5日、大阪美術新論社)開催(出品作品名不明)
		40	一部追加	美術新論社)開催。水彩画中心の展覧会で、出品作品は、水彩画「パリの女」「赤椅子の女」「ベニス風景」「アラバジヨンの夕立」「インスブルック風景」と油彩画「裸体」(他の出品作品名不明)。雅子夫人は、油彩画「春来る裏畑」「梨の静物」「花」「A嬢」等出品。
		46~49	全文抹消	この頃までに、南紀美術会(中略)会員となる。
1934	(昭和9)	15と16の間	全文追加	6月、アトリエ6月号(1日発行、11巻6号、アトリエ社)に文「国画会評」寄稿。 7月、アトリエ7月号(1日発行、11巻7号、アトリエ社)に文「粉河童男堂」寄稿、図版も掲載される。
		17の後	〃	10月、美之園10月号(1日発行、113号、美之園社)に文「実感」寄稿。 11月、木下義謙個展(19日~23日、大阪美術新論社)開催(出品作品名不明)。 11月頃、東京市渋谷区栄通2丁目13番地に転居。
1935	(昭和10)	1の前	全文追加	1月、アトリエ1月号(1日発行、12巻1号、アトリエ社)「現代作家素描集」に素描「少女」掲載される。
		11	全文抹消	この頃、東京市渋谷区栄通2丁目13番地に転居。
1936	(昭和11)	1	全文抹消	2月8日、母鈴死去。行年61歳。
		2~4	訂正	同月、二科会春季美術展覧会(24日~3月3日、日本橋高島屋)に「西洋梨の静物」出品(他の出品作品名不明)→同月二科会春季美術展覧会(24日~3月2日、日本橋高島屋)に「西洋梨の静物」出品(他2点の出品作品名不明)。

西暦	(年号)	行数	区別	事項
1937	(昭和12)	1の前	全文追加	2月8日、母鈴死去。行年62歳。
1938	(昭和13)	4~6	訂正	同月、一水会会員作品展(26又は27日~30日、銀座三味堂)に「桃と桜」他1点出品→同月、一水会会員作品展(26又は27日~30日、銀座三味堂)に「桃と桜」「アスペルジュの静物」出品。
1945	(昭和20)	1944年の後	全文追加	この年、疎開先で制作に励む。
1949	(昭和24)	4~6	一部追加	5月、第3回美術団体連合展(14日~6月5日、東京都美術館、主催毎日新聞社)に「須原宿の朝」「午後の須原」出品。
1950	(昭和25)	3の後	全文追加	8月、美術手帖8月号(1日発行、33号、美術出版社)に文「初めて油絵を描く人に〈風景画〉」寄稿。
1952	(昭和27)	5	訂正	「須興上松」→「復興上松」
1954	(昭和29)	15	〃	「銀杏呉須染付皿」→「銀杏絵染付皿」
1955	(昭和30)	8	〃	「試作辰砂金魚絵」→「試作辰砂金魚絵皿」
		8~9	〃	「平造り瓢形捻一輪差」→「手造り瓢形捻一輪差」
		9	〃	「試作吹紅金魚絵」→「試作吹紅金魚絵皿」
		9	〃	「刷毛目地錆絵」→「刷毛目地錆絵皿」
		10	〃	「銀杏葉文」→「銀杏葉文中皿」
		10	〃	「松樹型」→「松樹型小皿」
		11	〃	「童女絵染付」→「童女絵染付茶碗」
1956	(昭和31)	13~14	〃	「瑠璃釉龍目文ぐいのみ」→「瑠璃釉龍目文ぐいのみ」
1958	(昭和33)	7	〃	「嵯峨風景」→「桜島風景」
		15	〃	「辰砂横顔シルエット平鉢」→「辰砂横顔シルエット手造り鉢」
		16	〃	「吸坂手野菊平鉢」→「吸坂手野菊大鉢」
		16~17	〃	「辰砂魚文平鉢」→「辰砂魚文手造り鉢」
1960	(昭和35)	9	〃	「花ざくら絵五彩九谷大鉢」→「花ざくら絵五彩九谷大鉢」
1966	(昭和41)	15	〃	「小岩桜絵九谷」→「小岩桜絵九谷小皿」
1967	(昭和42)	16	〃	「奈良川の山藤」→「奈良井川の山藤」
1974	(昭和49)	1の前	全文追加	4月、兵庫県立近代美術館主催「特別展 日本洋画の原点と開花」(27日~5月19日、兵庫県立近代美術館)に滞欧時代の模写「ペロネーゼ作エマウスの奇跡」「プーサン作アポロンとダフネ」「ドラクロア作アルジェリアの女」「ドラクロア作ポアチエの戦い」2点、計5点が陳列される。
1976	(昭和51)	14	訂正	「屋敷の木曾御岳」→「屋敷野の木曾御岳」
		14の後	全文追加	9月、第38回一水会展(21日~10月8日、東京都美術館)に「オコタンペよりの清流」「新雪の白馬三山」「屋敷野の御岳」出品。

(1976年10月8日現在)

※行数の欄の数字は、各年の行の上から数えての数字となっている。

□ 昭和51年度後期 県立近代美術館常設企画展

会 期 昭和52年 1月13日～2月13日（毎週火曜日休館）  
 新収蔵品を中心とした絵画、彫刻を展観（入場者2,853名）

出 品 目 録

1	保田龍門	自画像	油彩・キャンバス	45.0× 38.0	1915
2	〃	村の娘	〃	83.0× 67.5	1916
3	〃	読 書	〃	65.0× 53.0	1921
4	〃	裸婦群像	〃	130.5× 194.0	1926
5	〃	裸婦立像	ブロンズ	高 170.0	1925
6	建島大夢	お湯のつかれ	〃	高 66.7	1913
7	〃	憩う女	〃	高 113.6	1925
8	木下孝則	後向きの裸婦の習作	油彩・キャンバス	100.0× 80.0	1925
9	〃	女優の像	〃	72.0× 53.0	1926
10	〃	赤衣の女	〃	73.0× 54.0	1934
11	木下義謙	同 窓	〃	73.0× 60.6	1924
12	〃	父の肖像	〃	65.0× 53.0	1926
13	〃	横たわれる裸体の習作	〃	116.8× 74.0	1926
14	〃	肖 像	〃	116.8× 74.0	1928
15	〃	静 物	〃	91.0× 72.7	1931
16	〃	赤衣半身像	〃	91.0× 72.7	1931
17	〃	横光線の肖像	〃	91.0× 72.7	1935
18	木下雅子	腕組む女	〃	73.0× 61.0	1929
19	〃	玉葱の静物	〃	73.0× 61.0	1930
20	〃	浴 後	〃	162.0× 112.0	1933
21	青山義雄	K夫人肖像	〃	80.0× 61.0	1930頃
22	川口軌外	少女と貝殻	〃	185.0× 280.0	1934
23	〃	ボヘミアン	〃	130.0× 96.0	1928
24	原 勝四郎	裸 婦	油彩・カルトン	72.7× 60.6	1930
25	〃	画工像	〃	64.7× 52.5	1932
26	〃	道 化	〃	90.0× 73.0	1941
27	石垣栄太郎	自画像	油彩・キャンバス	91.0× 32.0	1917
28	〃	女の肖像	〃	35.0× 28.0	1936
29	〃	K・K・K	〃	73.0× 93.0	1937
30	〃	恐 怖	〃	64.0× 104.0	1940
31	福沢一郎	なげきの市 I	〃	182.0× 228.0	1974
32	〃	鬼も忙し地獄の整地	〃	182.0× 228.0	1974
33	柳 頼雅	天意 1962	墨 ・紙	185.0× 95.0	1962
34	〃	天意 1962	〃	185.0× 95.0	1962
35	〃	天意 1970	〃	138.0× 72.0	1970
36	〃	天意 1971	〃	138.0× 72.0	1971
37	〃	天意 1972	〃	138.0× 72.0	1972
38	〃	天意 1976	〃	138.0× 72.0	1976
39	保田春彦	階段のある広場 SIRACUSA	ステンレス	75×75× 6	1973
40	〃	階段のある広場 TAORMINA	〃	75×75× 6	1973

□ 田 中 恭 吉 展

会 期 2月26日～3月21日（毎週火曜日休館）

主 催 和歌山県立近代美術館 / 後 援 和歌山県美術家協会 和歌山県立近代美術館友の会・和歌山  
 市教育委員会 和歌山市美育協会

田中恭吉は、和歌山に生まれ育ち、長じて東京美術学校に学んだが、病を得て再び郷里に帰り、大正4年23才で夭逝した詩と版画の天才である。萩原朔太郎の「月に吠える」の挿絵でよく知られているとおり、彼は、わが国で初めて「死の恐怖」と「性的情念」を芸術にとりあげ、その特異な作風は多くの人々に衝撃と感動を与えてきた。

本展覧会は、このような田中恭吉芸術の全ぼうを探り、その意義の解明を試みようとした展観であった。

出 品 目 録

1	落 葉	水彩・紙	24.3×15.5	1908
2	失題（雪原）	〃	23.0×30.0	1908頃
3	〃（花）	〃	10.0×14.3	〃
4	たうなす畑・他44点（同寸）	インク・紙	13.5×18.3	〃 写生帳より
49	和歌山公園にて・他44点（同寸）	〃	18.3×13.5	1909 写生帳より
94	失題（海）	油彩・板	33.0×23.0	〃
95	西の宮海水浴場	水彩・紙	11.0×17.5	1910
96	失題・他12点（同寸）	〃	9.0×14.0	〃 絵葉書形成
109	失題（こうもり傘をもてる子供）	〃	18.5×12.5	1911
110	〃（木立と花）	インク・紙	22.0×13.5	1912
111	薬屋のむすめ	墨汁・紙	15.0× 8.5	
112	自 像	木版・紙	15.2× 9.8	1913
113	病める夕	〃	17.0×11.0	1913
114	失題（草生）	〃	15.5×23.0	1913頃
115	やはらかなる入日	インク・紙	18.0×15.5	〃
116	入日と路	〃	18.0×17.0	〃
117	踊り子	〃	20.5×13.6	1913
118	毒 莓	〃	13.2×13.0	〃
119	暗の花	〃	17.0×12.5	〃
120	死に面接するところ	〃	11.5× 6.0	〃
121	失題（風景）	〃	15.5×23.0	1913頃
122	地上の幸福者	木版・紙	18.0×12.2	1914
123	埋 葬	〃	14.8×10.2	〃
124	芽のひかり	〃	8.6× 9.3	〃
125	春	〃	26.0×19.0	〃
126	春	〃	〃	〃
127	春	〃	26.0×12.0	〃
128	風 景	〃	13.0×19.0	〃
129	あをそら	〃	15.5×11.0	〃
130	そこにのみかがやく光	〃	9.0× 9.0	〃
131	焦 心	〃	21.0×10.0	〃
132	去勢者と緋罌粟	〃	18.5×14.0	〃
133	生ふるもの去るもの	〃	22.5×15.5	〃
134	記憶と忘却	〃	14.5×15.5	〃

135	女	木版・紙	16.0×11.5	1914	
136	五月の呪	〃	15.5×11.0	〃	
137	病児	〃	20.5×10.5	〃	
138	失題(椿)	〃	13.0×11.2	〃	
139	冬虫夏草	〃	15.8×13.2	〃	
140	劫初の一人	〃	18.0×12.0	〃	
141	とびさるまえに	水彩・紙	17.0×10.0	〃	
142	なまけもの	インク・紙	10.2× 8.8	〃	
143	死人とあとにのこれるもの	〃	18.0×14.0	〃	
144	スパーク	〃	19.5× 8.0	〃	
145	ある日の恐れ	〃	16.3× 8.3	〃	
146	自 像	〃	10.0× 8.5	〃	
147	最後の舞踏	〃	15.0×12.0	〃	
148	白昼の怠惰	墨汁・紙	10.9× 9.5	〃	
149	海辺の死人	〃	10.0×10.5	〃	
150	失 題	〃	14.0×12.0	〃	
151	絢はれゆく歓喜と悲愁	木版・紙	18.0×12.0	1915	
152	光	〃	14.2× 8.7	〃	
153	冬の夕	インク・紙	10.7× 8.5	〃	
154	陽光に光りとぶ小鳥ら	〃	15.4×11.0	〃	
155	絢はれゆく歓喜と悲愁	〃	11.0× 7.0	〃	
156	I 意志と災害第一	〃	15.0×10.5	〃	心原幽趣 I より
157	I 意志と災害第二	〃	〃	〃	〃
158	II 悔恨第一	〃	〃	〃	〃
159	II 悔恨第二	〃	〃	〃	〃
160	III 墓 場	〃	〃	〃	〃
161	IV 知慧咲く	〃	〃	〃	〃
162	V なやみのうちに栄光をみる	〃	〃	〃	〃
163	VI 魂の手もて現身を葬むる	〃	〃	〃	〃
164	VII わが死ぬ日を数ふる魔	〃	〃	〃	〃
165	VIII 懈 怠	〃	〃	〃	〃
166	IX うすきなやみ	〃	〃	〃	〃
167	X 清 飲	〃	〃	〃	〃
168	XI 地上の幸福者	〃	〃	〃	〃
169	XII 夜のおそれ第一	〃	〃	〃	〃
170	XII 夜のおそれ第二	〃	〃	〃	〃
171	I 悔恨のうちに咲く花	〃	18.2×12.1	〃	心原幽趣 II より
172	III 臨終悩苦	〃	18.0×12.3	〃	〃
173	崩 芽	〃	〃	〃	
174	失 題	〃	9.0×14.5	〃	
175	失 題・他8点(同寸)	インク・薬包紙	11.5×11.5	〃	
184	夕、喀血を予感しつつ	墨汁・紙	12.5×14.0	〃	
185	二つのいのち	〃	7.5×10.0	1915頃	
186	四つのいのち	〃	9.0×12.0	〃	
187	いのち	〃	7.5× 9.5	〃	

188	二つの世界	墨汁・紙	8.0×10.0	1915頃	
189	病院へ	〃	10.5× 6.0	〃	
190	影	〃	10.5× 7.0	〃	
191	病院の廊下	〃	8.0× 9.5	〃	
192	精神病者ら	〃	6.0× 6.0	〃	
193	サアニン妹	〃	16.0× 6.0	〃	
194	処女と童貞	〃	10.0× 6.5	〃	
195	失 題	〃	9.5× 6.5	〃	
196	失 題	〃	16.0×10.5	〃	
197	失 題(母子)	〃	15.5× 9.5	〃	
198	失 題	〃	15.0×10.0	〃	
199	峠にたった樵夫	インク・紙	20.0×13.0	〃	
200	崩 芽	〃	14.0× 8.0	〃	
201	空に咲くエテルの花	〃	7.0×11.5	〃	
202	ひそめるもの	〃	8.5× 8.5	〃	
203	墓を守る石像	〃	16.0×10.5	〃	
204	合奏墓春	〃	19.0×11.0	〃	
205	死	〃	8.5×12.5	〃	
206	死	〃	7.5×13.0	〃	
207	こもるみのむし	〃	15.0×10.5	〃	
208	失 題(紀州風景)	〃	34.2×27.5	〃	
209	失 題(不明門付近)	〃	34×28.0	〃	

### 3 共催展覧会

#### □ 第14回和歌山県美術家協会展

和歌山県美術家協会々員による総合美術展で、本県における美術の動向を示す恒例の展覧会

会期 第1期=6月17日~21日(洋画、彫塑、現代造形、写真) 第2期=6月24日~28日(生花、書、日本画、工芸)

主催 和歌山県美術家協会 和歌山県立近代美術館 / 後援 朝日新聞社和歌山支局 和歌山県立近代美術館友の会

#### □ 第11回和歌山県立近代美術館友の会展

県立近代美術館の友の会活動の一環として行なうアマチュア総合美術展(日本画、洋画、工芸、書、写真)

会期 2月16日~20日

主催 和歌山県立近代美術館友の会 和歌山県立近代美術館 / 後援 和歌山県美術家協会

#### □ 第30回県展特別記念展

県民の美術に関する愛好心と鑑賞力を啓発し、美術作品の創得意欲の昂揚をはかり、本県の美術文化の向上発展に資するために開催の公募展で、本年度は、30回を記念して本展に併せて歴代知事賞(第1席)受賞作品展を開催するとともに、記念誌「県展30年のあゆみ」を刊行した。(第9回県民文化祭参加)

会期 第1期=11月18日~22日 (日本画、書、生花)  
第2期=11月25日~29日 (工芸、写真、現代造形)  
第3期=12月2日~6日 (洋画、彫塑)

歴代県展知事賞(第1席)受賞作品展=11月18日~12月5日(火曜日休館・生花を除く各部門/於和歌山県立博物館)

新宮展=12月17日~19日(生花を除く各部門選抜/於・新宮市民会館)

主催 和歌山県教育委員会 和歌山県立近代美術館 毎日新聞社和歌山支局 新宮市教育委員会(新宮展)

主管 和歌山県美術家協会 / 後援 和歌山県 新宮市(新宮展)

### 4 貸館展覧会

会 期	名 称	概 要	展 示 室
4月2日~4月4日	第23回洗心書道展	書/西林凡石門下生	一/中/小
8日~12日	和歌山大学総合美術展	絵画・書・写真・生花/和歌山大学	一/中/小
15日~18日	和富会書道展	書/県立和歌山商業高校OBグループ	一般展示室
15日~19日	グループ「波」洋画展	洋画/グループ「波」	中展示室
15日~19日	和大絵画部4回生展	洋画/和歌山大学4回生	小展示室
22日~26日	住友金属絵画部展	洋画/住友金属工業(株)絵画部	一般展示室
22日~26日	第1回総合レザークラフト展	革工芸/同好グループ	中展示室
22日~26日	グループ「しつ」展	漆芸/漆器同好グループ	小展示室
29日~5月3日	第5回集団「光」写真展	写真/同好グループ	一般展示室
29日~3日	睦林会南画展	日本画/睦林会	大展示室
29日~3日	火旺会展	洋画	小展示室
5月7日~10日	和大絵画部2・3回生展	洋画/和歌山大学絵画部2・3回生	一般展示室
7日~10日	黎明クラブ写真展	写真/明楽光三郎主宰	大展示室
13日~17日	和歌山市医師会美術展	絵画・書・工芸・生花/和歌山市医師会	一般展示室
13日~17日	第41回エトアール洋画展	洋画/エトアール洋画会	大展/中展
13日~17日	勝和会水墨画展	日本画/水墨画同好グループ	小展示室
20日~24日	有人クラブ写真展	写真/駒木根紅花主宰	一般展示室
20日~24日	洋画12人展	洋画/同好グループ	中展/小展
27日~31日	第12回葵フォトグループ展	写真/亀忠男主宰	一般展示室
6月3日~6月7日	オール関西フォトグループ展	写真/関西写真家グループ	一般展示室
3日~7日	第41回木国写真友会展	写真/島村安彦主宰	中展示室
3日~7日	漆と花展	漆器・生花/橋爪靖雄主宰	小展示室
4日~6日	第14回書人会同人展	書/和歌山書人会	大展示室
10日~14日	示現会和歌山巡回展	洋画/中央展作品(選抜)と支部会員作品	全館
7月1日~5日	第8回樹展	洋画/絵画サークル「樹」	中展示室
2日~5日	創作手芸作品展	手芸/高野澄子主宰	一般展示室
2日~5日	和興会書道展	書/山本興石主宰	小展示室
14日~18日	第25回和歌山市美術展・第1期	日本画・書・工芸・生花/和歌山市教委	全館
21日~25日	同上・第2期	洋画・彫塑・写真	全館
29日~8月1日	和歌山県書道協会展	書/和歌山県書道協会	一/中/小
29日~2日	県立日高高校OB展	絵画/県立日高高校絵画部OB	大展示室
8月5日~9日	沸展	洋画/和歌山県出身美大生同好グループ	一般展示室
5日~9日	青甲会展	洋画/青甲会	大展/中展
5日~9日	律の会展	洋画/同好グループ	小展示室
12日~16日	グループ「プリミティブ」展	絵画・デザイン/和歌山県出身県外在学生	一般展示室
12日~16日	形成展	洋画/同好グループ	大展示室
12日~16日	県立海南高校OB美術展	絵画・彫塑/県立海南高校絵画部OB	中展/小展
19日~23日	グループ旺美洋画展	洋画/和歌山成人学級絵画教室OB	一般展示室
19日~23日	第6回耆魯会習作書展	書/大岡皓崖主宰	中展/小展
26日~30日	第4回県下高校教員美術展	絵画・彫塑/県下高校美術科教員	一般展示室
26日~30日	和歌山版画協会展	版画/和歌山版画協会	中展示室



8月26日～8月30日	毎日文化教室洋画部展	洋画/毎日新聞社主催の文化教室洋画部	小展示室
9月2日～9月5日	和歌山旺玄美術展	洋画/旺玄会和歌山グループ	一般展示室
2日～5日	新世紀美術展	洋画/新世紀和歌山グループ	中展示室
2日～5日	警察職員絵画クラブ「ひまわり」展	洋画/県警察職員絵画クラブ	小展示室
9日～13日	第9回和歌山県勤労者美術展	絵画・彫・工・写真・書/勤労者対象公募展	全館
18日～20日	県下高校商業美術展	デザイン/和歌山県商業教育研究会	一般展示室
17日～20日	日本画青樹会展	日本画/青樹会	中展示室
17日～20日	健筆会書道習作展	書/律筆書道会	小展示室
23日～27日	県民文化祭参加・文化協会展	絵画・書・写真・生花/和歌山文化協会	一展/小展
23日～27日	第10回三光会日本画展	日本画/山東光風主宰	大展示室
23日～27日	一良十悪展	絵画・造形/県立向陽高校OBグループ	中展示室
30日～10月4日	県民文化祭参加・県いけばな展	生花/和歌山県いけばな協会	全館
10月7日～11日	同上・紙人形展	紙人形/紙人形展実行委員会	一般展示室
14日～18日	同上・美術サークル連合展	洋画・日本画/県美術サークル連絡協議会	一般展示室
21日～25日	同上・俳画展	俳画/和歌山県俳画協会	一般展示室
28日～11月1日	和歌山日曜画家展	洋画/同好グループ	一般展示室
11月4日～8日	県民文化祭参加・写真展	写真/全日本写真連盟和歌山支部	一般展示室
5日～8日	手あみ手芸作品展	手芸/綾部道代手あみ手芸教室	小展示室
12月10日～12月13日	和大絵画部展	洋画/和歌山大学絵画部	一/中/小
16日～20日	県民文化祭参加 第19回県下高等学校総合芸術祭「美術展」	絵画・彫塑・工芸/和歌山県高等学校芸術科教育連盟	大展示室
23日～26日	県民文化祭参加 第19回県下高等学校総合芸術祭「書道展」	書/和歌山県高等学校書道教育研究会	大展/小展
23日～26日	あくど展	洋画/中学校美術科教員グループ	中展示室
1月6日～1月10日	'76第三文明選抜展	絵画・工芸・彫塑・書/中央展作品選抜展	全館
13日～17日	第6回オークレイ展	絵画・手芸/田中善弘主宰	一般展示室
13日～17日	拓美会和歌山支部展	拓画/拓美会和歌山支部	中展示室
13日～17日	ステーション絵画教室小品展	洋画/和歌山ステーション絵画教室	小展示室
20日～24日	新構造社和歌山支部展	洋画/新構造社和歌山支部	一展/小展
20日～24日	示現会和歌山支部小品展	洋画/示現会和歌山支部	中展示室
27日～31日	和墨展	書/和歌山大学書道部	中展/小展
29日～31日	市和商デザイン科卒業制作展	絵画・商業デザイン/和歌山市立商業高校	一般展示室
2月3日～2月7日	日中きり紙展	きりがみ画/日中きり紙同好会	一般展示室
3日～7日	やまびこ展	絵画・彫塑/和歌山市小中高教員グループ	中展示室
3日～7日	ワカヤマFCC撮影会作品展	写真/ワカヤマFCC	小展示室
10日～13日	創立30周年記念 信愛展	絵画・書・写真等/和歌山信愛女子短大	一/中/小
24日～28日	花王石絵写真部・絵画部合同展	写真・絵画/花王石絵写真部絵画部	一般展示室
3月3日～3月7日	和歌山県高等学校書道科教員展	書/和歌山県高等学校書道教育研究会	一般展示室
10日～14日	大東文化大学和歌山県人書作展	書/大東文化大学和歌山県出身OB在学生	一般展示室
17日～21日	和大美術科卒業制作展	絵画・彫塑/和歌山大学美術科	一般展示室
24日～28日	アトリエオノグループ展	絵画・造形/小野教治主宰	一般展示室
24日～28日	第37回国際写真サロン展	写真/全日本写真連盟	中展/小展

## 5 普及活動

### □ 美術館だより

「美術館だより」は、当館の広報紙として毎月1回発行、当館の主催及び共催展覧会の紹介と解説、美術文化関係論文、随筆、ニュース、各種美術展だより等を掲載している。発行部数2,100部。

#### 号 発行日 主要記事

- 124号 4月1日 神中糸子と工部美術学校(太田将勝) 新収蔵作品紹介
- 125号 5月1日 木下孝則・義謙両先生のことなど(和高伸二) 萩・津和野周辺を巡るバスツアー 春の洋画写生大会 移動美術館 県立近代美術館人事異動
- 126号 6月1日 移動美術館開催について(太田将勝) 第14回県美術家協会展開催要項 県立近代美術館使用料金改訂 友の会々員証発行について
- 127号 7月1日 雑感(木下義謙) 萩・津和野バスツアーに参加して(長谷利一) 友の会・県美術家協会の役員名簿
- 128号 8月1日 企画展の意義(和高伸二) 第30回県展開催要項(付・県展役員名簿) 堀川覚三氏逝去 友の会洋画部写生旅行
- 129号 9月1日 木下義謙作品展について(和

### □ 友の会活動

和歌山県立近代美術館友の会は、アマチュアのアート愛好家で組織され、年間を通じて、県民の美的素養の向上に寄与する諸活動を行なうとともに年一回作品発表の機会として「友の会展」を開催している。

昭和40年10月発足。52年3月末現在の会員数(一般会員956人、賛助会員70人)。

(注) 行事名、期日、〈テーマ〉、講師、参加人員の順に記載。

#### 〔美術鑑賞講座〕

- 5月16日 〈貝塚市水間周辺の文化財を探る〉  
和高伸二先生 20人

高伸二) 山崎祥石氏逝去  
友の会洋画部写生旅行実施

130号 10月1日 「木下義謙作品展」開催にあたって(三木哲夫) 紀州の社寺縁起絵展について(酒井哲朗)

131号 11月1日 田中恭吉小伝〔1〕(大槻憲二) 第30回県展日程表 美術鑑賞バスツアー

132号 12月1日 田中恭吉小伝〔2〕(大槻憲二) 第30回県展の記録

133号 1月1日 若い芽を育てよう(斎田武夫) 人間らしい暮らしの原点(玉井一郎) 明年を省みて(堀亨)

新収蔵作品の紹介(1) 裕伊之助作品集刊行紹介 田中恭吉小伝〔3〕(大槻憲二) 1977年の近代美術館主催展 友の会新春交歓パーティ

134号 2月1日 「田中恭吉展」開催にあたって(太田将勝) 後期常設展 友の会展開催要項

135号 3月1日 のこるてのひら(恩地三保子) 田中恭吉展によせて(小野忠重) 田中恭吉展によせて(平田家就) 移動美術館開催

5月28日～31日〈長州路一萩・津和野周辺を巡る〉  
館長、次長引率 60人

6月27日 〈正木美術館「春季特別展」鑑賞〉  
正木孝之館長 20人

10月24日 〈木下義謙氏の芸術について〉 三木学  
芸員 30人

11月7日 〈特別展「紀州の社寺縁起絵」を観る〉  
県立博物館酒井学芸員 27人

11月20日 〈「ドカ展」を観る〉和高伸二先生 39人

1月9日 〈新資料の紹介〉 和高伸二先生 20人

2月27日 〈特別展「紀州の諸窯」を観る〉  
県立博物館梅原学芸課長 21人

3月20日 <田中恭吉の芸術において> 太田学  
芸員 20人

〔洋画実技講座〕

4月4日 <桃畑のある田園風景を描く>  
若林昌峰先生 36人

5月9日 <春の洋画写生会>浜田邦男先生 46人

6月13日 <大池を描く>山東好雄先生 32人

7月11日 <夏景色の根来寺を描く> 小川英夫  
先生 43人

8月22日 <粉河寺を描く> 八幡三郎先生 38人

9月18日~19日 <初秋の荒船海岸を描く> 益山  
英吾・浜口勇一先生 46人

10月17日 <雑賀崎を描く> 中島久次先生 40人

11月28日 <バレリーナ> 小川英夫先生 41人

12月19日 <人形のある静物>倉田純三先生 20人

1月9日 <静物画のいろいろ>佐原光先生 39人

2月20日 <魚のある静物> 橘喜久雄先生 36人

3月20日 <静物画を描く> 松下英雄先生 9人

〔日本画実技講座〕

4月11日 <山水画の基本> 寺口関山先生 42人

5月30日 <花鳥画の基本> 青木虹興先生 34人

6月20日 <花鳥画の基本> 青木虹興先生 43人

7月11日 <花鳥画の基本> 青木虹興先生 57人

8月22日 <花鳥画の基本> 青木虹興先生 54人

9月19日 <花鳥画の写生> 青木虹興先生 35人

10月24日 <花鳥画の基本> 青木虹興先生 51人

11月28日 <写生と制作> 古村徹三先生 51人

12月19日 <写生と制作> 古村徹三先生 41人

1月9日 <写生と制作> 古村徹三先生 48人

2月13日 <写生と制作> 古村徹三先生 49人

3月27日 <写生と制作> 古村徹三先生 30人

〔写実実技講座〕

4月11日 <月例コンテストと作品指導>  
駒木根紅花先生 6人

5月16日 <月例コンテストと作品指導・木材港  
養翠園モデル撮影>西川高三先生 8人

6月20日 <月例コンテストと作品指導・紀伊風  
土記の丘を撮る>西川高三先生 10人

7月18日 <月例コンテストと作品指導・高等学校  
野球県大会を撮る>西川高三先生 10人

8月22日 <月例コンテストと作品指導・野鉄沿  
線を撮る> 西川高三先生 10人

9月19日 <月例コンテストと作品指導>  
西川高三先生 10人

10月17日 <月例コンテストと作品指導・根来寺

モデル撮影会> 島村安彦先生 7人

11月28日 <月例コンテストと作品指導>

島村安彦先生 10人

12月12日 <月例コンテストと作品指導>

亀 忠男先生 8人

1月9日 <月例コンテストと作品指導>

亀 忠男先生 9人

1月16日 <大原三千院周辺撮影会> 7人

2月20日 <月例コンテストと作品指導>

亀 忠男先生 8人

3月6日 <今井町周辺風景及び三輪そうめん工  
場を撮る> 亀 忠男先生 8人

3月27日 <月例コンテストと作品指導>

亀 忠男先生 10人

〔陶芸実技講座〕

4月11日 <楽焼による初歩の陶芸制作>

山本 学先生 35人

4月18日 <電気ロクロによる陶芸制作>

柏井良夫先生 6人

4月24日 <絵付、焼成> 山本 学先生 38人

5月9日 <電気ロクロによる陶芸制作>

柏井良夫先生 11人

5月16日 <楽焼による初歩の陶芸制作>

山本 学先生 33人

5月22日 <絵付、焼成> 山本 学先生 29人

6月6日 <楽焼による初歩の陶芸制作>

山本 学先生 34人

6月20日 <電気ロクロによる陶芸制作>

柏井良夫先生 14人

6月26日 <絵付、焼成> 山本 学先生 45人

8月8日 <楽焼による初歩の陶芸制作>

山本 学先生 39人

8月22日 <電気ロクロによる陶芸制作>

柏井良夫先生 10人

8月28日 <絵付、焼成> 山本 学先生 45人

9月12日 <楽焼による初歩の陶芸制作>

山本 学先生 55人

9月19日 <電気ロクロによる陶芸制作>

柏井良夫先生 13人

9月25日 <絵付、焼成> 吉増達夫先生 43人

10月10日 <楽焼による初歩の陶芸制作>

吉増達夫先生 41人

10月17日 <電気ロクロによる陶芸制作>

柏井良夫先生 13人

10月23日 <絵付、焼成> 吉増達夫先生 55人

1月9日 <初級、上級合同制作>  
柏井良夫・吉増達夫先生 41人

1月22日 <絵付、焼成> 吉増達夫先生 40人

2月6日 <楽焼による初歩の陶芸制作>  
吉増達夫先生 44人

2月13日 <電気ロクロによる陶芸制作>  
柏井良夫先生 8人

2月26日 <絵付、焼成> 吉増達夫先生 45人

3月6日 <楽焼による初歩の陶芸制作>  
吉増達夫先生 32人

3月13日 <電気ロクロによる陶芸制作>  
柏井良夫先生 9人

3月26日 <絵付、焼成> 吉増達夫先生 35人

## 6 昭和51年度所蔵作品

### □ 購入作品

No.	作者名	作品名	材質・形状	寸法	制作年	出品展覧会名
1	須田国太郎	山陰風景	油彩・キャンバス	60.6×50.0	1950頃	
2	鹿子木孟郎	パイプを持つ男	〃	79.5×64.0	1906	
3	浜口陽三	洋梨とぶどう	紙・メゾチント	28.0×37.0	1951	
4	〃	スペイン風油入れ	〃	28.5×28.5	1954	
5	〃	魚とさくらんぼ	〃	14.3×19.2	1958	
6	〃	ういきょう	〃	29.0×44.0	〃	
7	〃	白菜	〃	29.5×44.0	1960	
8	〃	糸と編棒	〃	23.3×53.8	1962	
9	〃	蝶と太陽	〃	19.5×19.5	1969	
10	〃	26のさくらんぼ	紙・リトグラフ	60.4×46.4	1971	
11	〃	赤いパイプ	〃	60.8×46.0	〃	
12	〃	テーブル掛とさくらんぼ	〃	60.2×45.8	〃	
13	〃	くるみ	〃	60.5×46.4	〃	
14	〃	1/4のレモン	紙・メゾチント	16.0×16.0	1976	

### □ 寄贈作品

1	柳 頼雅	天意	1968	墨・紙	189.0×95.0	1968
2	〃	天意	1968	〃	〃	〃
3	〃	天意	1970	〃	138.0×72.0	1970
4	〃	天意	1970	〃	〃	〃
5	〃	天意	1971	〃	〃	1971
6	〃	天意	1972	〃	〃	1972
7	〃	天意	1974	〃	〃	1974
8	〃	天意	1975	〃	〃	1975
9	〃	天意	1976	〃	〃	1976
10	〃	天意	1976	〃	75.0×60.0	〃
11	〃	天意	1976	〃	〃	〃
12	〃	天意	1976	〃	〃	〃
13	〃	天意	1976	〃	〃	〃
14	〃	天意	1976	〃	〃	〃

15	木下義謙	読書の母	油彩・キャンバス	6 F	1922	
16	"	同窓	"	20 F	1924	第11回二科展
17	"	少年の像	"	10 F	1925	第12回二科展
18	"	横向きの婦人像	"	20 F	"	第13回二科展
19	"	父の肖像	"	15 P	1926	"
20	"	N氏の肖像	"	12 F	"	"
21	"	横たわれる裸体の習作	"	50 M	1926	"
22	"	車内のロシヤ軍人	"	6 F	1928	パリ二人展
23	"	坐せる婦人像	"	25 M	"	"
24	"	風景	"	6 F	1928頃	"
25	"	カーニュ風景	"	20 F	1929	第19回二科展特陳
26	"	婦人像	油彩・カルトン	6 F	"	第41回アンデパンダン展
27	"	アカデミー(男)	油彩・キャンバス	8 F	1930	第19回二科展特陳
28	"	日曜日の公園	"	100 P	1931	"
29	"	二人の裸女	"	10 M	"	"
30	"	静物	"	30 F	"	{ 第19回二科展特陳 1931年サロン・ドートンヌ展
31	"	赤衣半身像	"	30 F	"	第19回二科展特陳
32	"	横光線の肖像	"	30 F	1935	第22回二科展
33	"	森林地帯緑陰	"	100 F	1968	第30回記念一水会展
34	"	峠道よりの眺め	"	100 P	1973	第35回一水会展
35	"	婦人半身スケッチ	水彩・紙	27.0×36.5	1928	
36	"	屋上(エスキース)	"	36.6×27.7	1939	第3回一水会展
37	"	延安風景	"	40.7×31.4	1963	
38	"	裕三彩亭氏像	"	25.7×35.5	1973	
39	木下雅子	池畔	油彩・キャンバス	20 F	1927	第14回二科展
40	"	肘つく女	"	20 F	1929	1929年サロン・ダール・フラン ンセイ・アンデパンダン展
41	"	玉葱の静物	"	20 F	1930	{ 第42回アンデパンダン展 1931年サロン・ドートンヌ展
42	"	浴後	"	100 P	1933	第20回二科展
43	"	裸女と黄衣	"	80 F	1933	第21回二科展
44	"	カーネーションと裸女	"	80 F	1934	"
45	"	裸女	"	20 F	1934	"
46	青山義雄	K夫人肖像	"	25 P	1930頃	

## 7 所蔵品貸出状況

貸出先	展覧会名・会期	貸出作品名	種別	点数
東京都美術館	戦前の前衛展 51.5.1~6.27	保田龍門作「アンドレの首」	彫刻	2
		「裸婦立像」 「自画像」 川口軌外作「少女と貝殻」 裕伊之助作「ブザンソンの風景」	洋画	3

## 8 県立近代美術館

### 協議会委員

氏名	住所
明楽光三郎	海南市日方582
大岡 皓崖	和歌山市黒田168の9
川瀬 浩一	御坊市御坊79
楠見 勝寛	和歌山市新在家56
児玉 正之	那賀郡粉河町中山3
斎田 武夫	和歌山市湊671
島村 安彦	和歌山市磯山町4の2
杉本 義夫	新宮市船町2の6の6
高橋 正司	伊都郡かつらぎ町妙寺902
玉井 一郎	和歌山市寺町13
寺田 健治	和歌山市新堀北ノ丁3の40
富松 助六	和歌山市北坂ノ上ノ丁1
尾藤 昌平	和歌山市新堀七軒町5
室谷 文男	和歌山市園部有功ヶ丘団地152の8
脇村正太郎	田辺市栄町52

会長 明楽光三郎  
副会長 室谷 文男

## 9 県立近代美術館

### 職員構成

館長	堀 亨
次長	高 巖
(事業課)	課長 野口照彦
	学芸員 太田将勝
	学芸員 三木哲夫
	技師 松下勝行
	嘱託 和高伸二 (非常勤)
(庶務課)	課長 吉田 禎之
	主事 三宅慎治
	主事 西原志郎